川柳の雑誌

麻生路郎☆主宰

Senryu Zasshi

pensoj flugas trans la land - limon

昭和廿二年七月一日第三種郵便物認可
昭和廿二年十一月一日發行 第三卷第九號
（毎月一回一日發行）
創刊大正十三年・通卷二百五十九號

No.259

十一月號

續川柳講座（18）

麻生路郎

句意の判り易い句と判り難い句

ここに、

轉んでも自己宣傳は忘れてず　（袋食子）

と云ふ句があります。世の中には、こんな男が、沢山居りますので、なるほどと直ぐにうなづけます。

姑の不幸は耳がまだ聞こえ　（滴潮）

こんな姑もそこらで、よく見かけるので、わざ〳〵句意を説明しないでも、判るのであります。

恩返しに行けばおためを又もらひ　（森集）

これとても世間にはよくあることなので、決して意味のとりにくい句ではありません。

挨拶が物をもらつた声となり　（菜）

この句も、そこらでよくぶツかることなので、句意が判らないと云ふよりも写生の巧みなのに感心させられる位のものです。

物實は障子もあけず断られ　（山月）

これも説明の要がないほどよく判る句であります。この句を読まれた時に、自分の行動をそのまま写生されたやうに思はれた方もあるでせう。

斯うして川柳の一句一句を拾ひ擧げて見ますと、誰にでも句意がよく判るのでありますが、中には一読しただけで句意の判り難いのもあり、專門的な知識がないと全然句意の判らないのもあるのであります。

川柳の大半が、常識人に判り易いので、くみし易いものとされてゐるやうでありますが、さて作句して見ますと、句意の判り易い句が必ずしも作り易い句であると云ふ訳でもなく、秀れてゐる句だといふ理由にもならないのであります。誰にでも句意がハツキリと判つて、しかも秀れた句を作ることはなか〳〵容易なわざではありません。平易な表現のうちに、妙味を持たすことは多年の作句精進が必要であつて、多くは、句意はよく判ると云ふ反面に、平凡な句、陳腐な句に墮し易いのであります。

では、門外漢に、句意の判り難い句や、全然判らないやうな句が秀れた句かと云へば必ずしもそうだとは云へません。門外漢や初歩の人に解し難い句であつても、凡句は凡句であつて、それが凡句であるか、秀句であるかを知ることは、その道の研究にまたねばならぬ訳であります。

川柳が大衆のものであると云ふところから、平凡な作家を多く生んで柳壇の水準を低下させ、そこらに、多く見受ける判り易い凡作を羅列してこれが川柳だと云ひ、大衆も又、そんな凡作が川柳だと考えるところに、識者から川柳はつまらないと云ふ声も出て來るのであります。

川柳が一つの詩である以上大衆に判ると云ふことをのみ目指して押し進むことは全く當を得てゐないので、たとへ解し難い句とならうとも、藝術的な匂ひの高い句の方向へ進むべきだと思ひます。

前揭の句が判り易い句であることと、佳吟であることとは認めていゝと思ひますが、川柳の表現技巧や、視野がこれ以上に出ないものだと考えることは、全く理由のないことであります。

前揭の句は何れも人情の機微に触れて居ります。つまりそれ〴〵に穿ちがあります。この穿ち味が人の肺腑を衝くので誰にでも判り易いのであります。

ところが、こゝに、

火の姿勢と揺れ居ると揺れる　（耕一路）

何処折つても鹿の角じみるいちぢくの木　（同）

と云ふ句があります。これ等の句にも多少の穿ち味はありますが、穿ちの句と云ふよりも、より以上に詩美の探究に重点が措かれてゐるのであります。なるほど判ることは判りますが、これ等の句は前揭の穿ち味の句と比較して、判り方に霞がかかつたやうに思はれるのであります。

そしてこの霞は初心者にとつては頗ぶる難物であります前揭の句が把持してゐるやうな人情味を何処にも発見することが出來ないからであります。これでも川柳なのであらうかと云ふ疑問すら生じるのであります。

この霞の味、セロハン越しの味、ヴエールの味、裏箔の味は作品それ〴〵の雰囲氣や匂ひを異にして價値づけるもののでありますが、川柳を作つてゐると云ひながら一部の川柳人には、未踏の境地として残されて居ります。

しかし「火の姿」の句にしても「何処折つても」の句にしても、比喩の面白さを詠んだこと位は、少しく川柳したものであれば判る筈であります。

ところが、

君見給へ蔓蘿草が伸びてゐる　（路郎）

一時間後の風景牛が向きを変へた　（耕一郎）

生きる凄さよ海月・磯ぎん・雲丹・海鼠　（同）

パットの煙よ、唐草模様が上手だれ　（同）

などの句になると、てんで判らないと云ふ方があります。

一つの言葉にも、その意味を適確に表はすものと、その感じを表はすものとあるやうに、一句そのものが、主として表意型の句と表情型の句とがあります。つまり穿ち本位の句は前者であつて、詩美本位の句は後者であります。永い間作家生活をしてゐても

大阪そごう
そごう卸商品館
十合商事株式會社
西區土佐堀一丁目
そごう難波店
地下鐵ナンバ驛上階
そごう梅田食品市場
大阪驛東口
そごうアベノ店
上町線終点前
そごう更生デポー
大阪驛前

穿ち本位の句以外は理解の出來ない作家が相當にありますたとへ理解は出來ても、作句は出來ないと云ふ作家もあります。これは作家の素質に起因するのであります。「君見給へ」の句や「一時間後の風景」の句などは說明したり、教えたりする句ではありません。幾度も味讀して、自ら感受する句なのであります。それを知性で知らうとするところに無理があつて、いよ〳〵判らなくなるのであります。しかしある程度の解說はして出來ないことはありません。しかし解說によつて知る範圍は矢張り知性の範圍でありますから、藝術の極致に觸れることは至難であります。

「君見給へ」の句は、曾て私が阪神沿線鳴尾に住んでゐる時代に作つた句であります。時は冬でありましたが、裏庭へ出て見ますと樹といふ樹、草と云ふ草がすべて枯死して蕭條たるありさまでした。いちぢくの樹はまるで骸骨のやうに見えました。ところが、そこには黑々とした土を割つて、菠薐草が伸びてゐるではありませんか。私の驚きは大したものでありました。自然の力の偉大さに驚いた私は「君見給へ」と呼びかけたのであります。そこに誰かがゐたわけではありません。呼びかけたのは世間の人達であつてもいゝし、私自身であつてもよいのです。

「一時間後の風景」の句にしても矢張り解說をしたところでホントにこの句の味が判るかどうかも疑問であります。芭蕉のエポックメーキングをなした句と云はれてゐる「古池や蛙飛び込む水の音」を解說したところで何の変哲もないのと同樣であります。しかし変化を発見したのであります次ぎに、「生きる凄さよ」の句は作者が海月や磯ぎんや雲丹や海鼠の如き異形なものに、不可思議な生命力を感じたのであり「バットの煙よ」の句には作者の想像力の豊さを知ることが出來るのであります要するに、これ等の句の作家の詩趣に溶け込むことが出來ない限り、ホントの句は判らないのであります。

不朽洞句帖

麻生路郎

たれの墓だか赤い蜻蛉が飛んで來た

陶枕曰く重役業はよし給へ

實行は俺も出來ない天聲人語

社會党か君も西尾の亞流だね

握らせりや握る社党の淺間しさ

ワイシヤツもよれよれ左派の左派に居て

大臣かフフンと教授室の隅

「一時間後の風景」の句も解說が出來ない訳ではありません。由來風景と云ふものは動きのないもののやうに思はれてゐるものであります。一寸見ると、そのやうにも見えるものでありますが、この句では、作者がフト氣づくと、牛が向きを変へてゐたのであります。作者としては大きなれば難なく判る句なのであります。「稅務署か」の句はインフレ景氣の經濟的不安定に喘いでゐる人達を尻目にかけた稅務署の人たちや、巡査が所謂役得でもつて、のう〳〵と生きてゐるのを見て詠んだ句であります。「小心の」句も法網の裏をくぐる、つまり闇の一語さえ理解出來れば、なんでもなく判る句であり「花見酒」の句は五百五十円が公定値であることさへ判れば判る句であります。むしろ、これ等の句が判り難くなるのはインフレ時代が去つて、稅務署の役人や巡査が、薄給に甘んじなければならないやうな時代が來た時、何故、稅務署の役人や巡査なんかに、なつてしもたろかと云つてゐるのか、句意が判明しなくなるのであります。闇とは何んのことだか判らなくなるし、一升五百五十円と云ふべらぼうな酒の値段が、何んのことだか判らなくなるのであります。

同じく句意が判らないと云つても、

稅務署か巡査になつてしもたろか　（幽王）

小心の少うし闇もしてこまし　（水車）

花見酒一升五百五十円　（方正）

のやうな句は、これ等の句が生れた時代の世相を知つてゐると云ふやうな句があります。

滅茶にタバコが高くなつたので愛煙家は、タバコが切れると吸殻を探してまでタバコをむさぼり喫うてゐる風習を知らぬ限りはこの句を解することは出來ないでせう。それに、この句は二重人格を詠んだ心理描寫の句ですから、「も一人の自分」と云ふ表現の巧さを解する人でなければ句意が充分に判るとは云へますまい。こんな句も今に難句となつてしまう句でせう。

同じく時代が判らないと、判らなくなる句に、

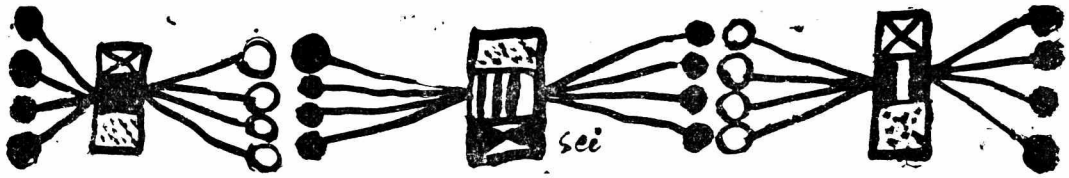
も一人の自分吸殻拾ひかけ　（玲之介）

次に、

エロ談議又阿部定の話が出　（柳路）

などの句は、阿部定と云ふ女が、疾妬のあまり、情人の男根を切つて死に到らしめたといふ事件さえ判れば難なく判る句であります。同じく句意が判らないと云つても、風俗や習慣や世情などが判らないので判らぬのと、語彙そのものが理解し得ないのと、詩を解し得ないために判らないとの違ひがあるのであります。しかし、それ等の難點が辛じて判つたとしても、その句が秀れた句であるとは限らないのであります。

要するに、誰にでも判る句で名句を詠むことが出來ればそれに越したことはないのでありますが、少々難澁な辭句で表現したとしても秀句できへあれば、いゝのであります。それを、判らない句はつまらない句だといふやうな考え方をしたり、いつまでも柳樽のワクの中に閉ぢ込めておこうとするやうな考え方は、おそろしく川柳の門をせまくする者であります。



兵庫縣　奥村丹路

狐と狸以上には出ず君と僕
あすと言ふ日を子供たち約束し
のど自慢そんな世界もあるのなり
女心の鮎と鰯とどちらせむ
果しなき道を人間作りあげ
鉄橋のある風景に子を連れて
一生をかけて会社の椅子にあり
ふるさとの如くとしより死をねがひ
むしろ死を恋ひける頃の十八九
硝子と硝子相うちて燦と地に
もの云はぬ花嫁姿たゝへられ
そも〳〵の嘘の始めのゴム乳豆

大阪市　武部香林

先生の還暦僕は墨をすり
　還暦句会終了後
外出もせず朝顔と話したり
　世界展望
スターリンが笑へば明るくなるならん
トラックの夢ははかなし検問所
口髭が東條に似て嫌がられ
たまりかねた一人がフッと自殺する
無雑作にハタハタが死ぬ秋の風
疎開者の語尾に自嘲が揺れてゐた
キャンデーの箸が落ちてる田舎道
開襟で來たのに薄女郎花

奈良縣　上田翠光

出るとこへ出て学歴の恨めしく
人の手のかくもうるさし蠅の身に
教壇に立つ身の恋はもどかしく
松風のキリへ涙ぐむ過去を持ち
見返らぬ人を見送るいぢらしさ
理性と云ふ冷たいものにブツつかり

鳥取縣　大西八歩

宝塚線の中のセレナーデ
食糧通帳のありかへ妻を叱りつけ
便所拝借ついでに猫とたはむれる
ワイフなどまだ先きのこと靴、鞄
京の寺隣りはヂヤズの燈がともり
落鮎はタマキ・三浦と云ふ姿
女盛りも赤の似合ふ間
地図に無い村を闇屋に教へられ
悪税に莚旗など押し立てん
秋雨の渡船無言のまんま着き
集合は調子合せて持つて行き
群集のかくも知らざる顔多く
良妻の十人までは生む氣でゐる

横濱市　福田山雨楼

秋風やわれ世の中にさからわず
　森井夢十氏を悼む
共に子を戦死させたる天の川
　岡病吟
打てば響く身体であつた腕を撫で
闘病え皆默してる手内職
　藪原博士を悼む
学問の深さを思う京の空
川柳忌亡友の手紙を懐しむ

尼崎市　水谷鮎美

忙しくビールをのんで儲けてゐる
アルバイト日焦けしたのがよく儲け
虫籠は古び凹み夏涼し
ちりとりのペコンと秋の音をたて

旭川市　宮田不二

教室の窓へ小使さんの猫
キャンデーの一個がとこ砕け落ち
ぜにかねの事で職員室の雲
前任地からの渾名で御着任

大阪市　福田妄夢

ボート漕ぎ漕ぎ〃あゝ誰か夢なき〃
催促をされてる方も酔うて居り

奈良縣　西垣錦風

間違へば舌かむ歌が流行出し
喫茶店儲けた頃に模様が
言ひ分をしまいまで聞く社長室
男手がほしいと思ふ大嵐
手相見る女結局さくらなり

山口縣　岡村路三

お土産に勿体つける里の母
今頃は船かと父はポツリ云ひ
ライターが又變つてて父若し
絵日傘の主にいそいだむだな足
駅員は非番と見えてかばん下げ

大阪市　市場沒食子

疑へば日頃の彼の金づかい
引揚げに父の名がなし秋の立つ
親の眼にさへもこの娘は多情者
血壓で名匠遂に引退か
若いのがやつぱりよいか連れ歩き
買うたのかもろたか尼も芋を下げ

名古屋　吉田水車

いつの間にやら裏に本普請
居らぬかとおもえば動く西瓜守り
たくあんを噛んだと見えぬルーヂュです
ひそやかに吾が誕生を配給酒
秋風を一番先きに靴みがき
平沢と聞いて絵の額おろされる

大阪市　須崎豆秋

うしろにも前にもスリがゐそうなり
秋動き出すと大きな帯を締め
さみしさに手紙を書いてばかりゐる
税務署とたゝかふつもり戸を閉める
夏草に煙突一つだけそびえ

平沢自白の発表

おやおやおれと平沢おない年

大阪市　竹内潮花

君の掌の温くみへ嘘はつけぬもの
何日からか駅まで送る妻になり
歌劇出て妻の蛇ノ目へ吸ひこまれ
ひまわりも僕もどうやら秋になり
停電のなかで長唄弾き終り
汽車賃があがり死にめによう逢わず

滋賀縣　北川春巣

居残りに煙草がきれて落付けず
一番で発つた証拠の傘を持ち
退廳の化粧残暑をぐちりつゝ
偏食の子も食前の掌を合せ

奈良縣　尾崎方正

尖んがつた顔下駄履を派手に組み
女外交夫あるのをふせて置き
箸にも棒にも掛らない歸り

姫路市　夷一笑

書記長だ個人だ耳がたこになり
教会へ自作の茄子を提げていき
コスモスの咲く迄待てずかたずける
平穏の色にまたゝく誘蛾燈
朝顔の未練たらしく咲く九月

大牟田市　高田抱逸

妓を入れて「月が出た〳〵」屋形船
サンダルに凡そ縁なくミシン踏む
奥様のまわりに封建まだ匂ひ
同権のワイフだけれどよくつかへ
きれい好きの叔母へ似合ひの嫁がくる

某工場

仕事二分朝もお晝も委員会

大阪市　村上角堂

枕をば「ボール」の様に「キヤツチ」する

大阪市　木下幽王

ふるさとへ來てなほ懐しき溢園扇
一旦緩急あれば逃げるだけ逃るなり
此の家も新聞紙のトイレット
本名を呼ばれて藝妓ぎくりとし
仙花紙に一大野心作がのり
エキスパートと云はれて税務署に睨まれる
還暦へこともあらうに米が減り
しよんぼりとサラリーマンの兒が遊ぶ
妻もさるものもうあなたなど甘えない
お神楽もスロークイック歩をはこぶ
空財布が泣いてゐるよ祭のたいこ
平和日本を謳歌して肥車の往く
憎らしい程にお医者は肥えてゐた
大黒柱にしてはこせ〳〵した男
縹渺と海は理性を尖らせる
六人目妻も機械化的に產む
吾ながら影のうすさを知つた腕
此の店も儲らぬらし将棋板

鳥取市　中島鉄洲

残念な事に朝鮮語もできず
ペニシリンの値は病人に知らすまい
切抜帖(スクラップ)倖の爲に残さんか
女房に勝ちを譲つて飯にさせ
たまさかの儲を妻に誇りとす
夕燒の唄に女の去に支度

大阪市　橋本美奈子

氷西瓜へそくりでこつそり喰べてくる
引揚を待つ老夫婦星を見る
夕涼みうちの子だけが歸らない

出雲市　尾絲之助

サラリーを知らずや自轉車又パンク
トマト一皿女の話は長い

大阪市　水谷竹荘

スナップは人の女と写される
貧乏になれてる妻にはげまされ
悠氣することも忘れる物價高

吉田斜水氏男子出生

子のそばへわざ〳〵行つて寝ころがり
產声に漫画のようなあわてよう

大阪市　稻葉鳩花

佛さんたつた一個のリンゴだが
だまされた娘と出会ふ新世界
共稼ぎ西と東へ向いて出る

下関市　國弘半休

立話二階で聞いてるとは知らず
新刊は未だか〳〵と療養所
神主の息子も復員せぬらしい

兵庫縣　小沢史葉

湯治客みんな闇屋の顔をして
発奮をしたが三日でバーの隅

兵庫縣　小西無鬼

預金封鎖解除
政府もう財布の底を見透かして
雨宿り序に便所かりて去に
ワンピース夏の女の乳の線
火を貸した上に新聞借りられる

神戸市　大鶴喜由

手製々々君も一杯聞こしめせ
女だけに薄情の言葉ある如し
勞と資最早や押しの手あるばかり
お出でたなと懸想娘知り
掌に殘る風を一切空と知り

高槻市　久連松春月

月見草汽車の旅をばなぐさめる
時たまは俺の意見も聞いて呉れ
ちとひどい人を機械と思ひなや

新居濱市　在間小楼

蠅たゝきついでの虫もたゝかれる
シツカロール匂ふ子をだく夕涼み
敗戰の日から動かぬ起重機の

高槻市　手島一舟

夏休み泳がぬ父もついて行き
世辭のない挨拶かわす菜葉服

茨木市　下山清潮

今会つて別れ〳〵にぬれて行き
御近所は夏休み有り墓參です

吹田市　野本呑水

腕白のお詫びガラスの寸をとり
喫う事と屁理窟だけは大人なみ

遺品わけむつきにいいのを忘れられ

布施市　糸本醉月

大掃除防毒面が飛んで出る
產制は是か非か國論待ちきれず
御先祖も代用食を召し給ひ

布施市　大塚一球

ともかくも喰へる身分で居る巡査
形見まで手放す妻は長く病み
言論の自由私は喰べるだけ
平然と読むエロ本へ電車ゆれ

尼崎市　早川聽松

方針がついたかトカケ動き出し
痩我慢など馬鹿らしき世なりけり
日本も明日喰う米を借りる仕儀

奈良縣　白牛奇朗

こゝが美味いと撫でたら牛が振りむいた
暑氣当りよと女房氣にもせず

岡山縣　山分北路

すだれの奥に裸でおりまする
ストの朝母へ小さく詫びて出る

大阪市　吉田斜水

水虫の議論に秋の風が吹き
儲かつたとこまでよいが税があり

下松市　山根白星

挨拶は抜きだとビール提げてくる
想ひ出にふれてすゝまぬ原稿紙
陳情の歸り世間が分りかけ
金なぞと笑へば若いせいにされ
法学士男まさりの姉があり

瀨戸市　鈴木幹夫

なにごとも佛にたよるお母さん
褌を一本ほして公休日

松山市　前田伍健

めぐりあうまでをさすろう靴みがき
娘の理想月一萬の給料とり
秋ですな秋だわ二人だけの道
地盤低下濱へ畠へ來る千鳥
地盤低下人間慌てまい事か
背廣服農家生れで農きらい
紙幣束をつかんで意味がないと云う
御老体御自愛などゝ五十代
金杓子鍋底という音をさせ
新聞社我社の恥は記事とせず

大阪市　橋本綠雨

涼み台へちまの月がまんまろし
同権と云へば喜ぶ笑ひやう
住職を訪へば畑にゐると云ふ
ミスボリス視線をさけるとこに立ち
違反者が逃げたわといふミスボリス
初恋が忘れ切れないミスボリス
愛想のない娘にされるミスボリス

金沢市　安川久留美

M病院にて
よく見れば猿に似ている飢えている
俯向いた植木鉢から通ふ蟲
梅干の種なめつくし生を知る
いかめしや畑をくぐる猫の髭
錠剤が悪い手相え五粒のり
パン一ツ皿にすわつている悟り
星の絵の窓せめてもの生残り
壁に見る誇大妄想秋わ闌け
きちがいの女に無駄な片笑くぼ

（十月九日）

川柳漫釈 漫筆は動く（五）

小畑自由朗

位牌屋のお世辞陰氣な聲になり　茂穂

「へーい、それは〳〵どうも三ツと云へばお可愛らしい盛りで、何んとも早、御愁傷さまで、いや、御胸中重々おさつし申し上げまするでござります。で、ねんごろにおまつりになりますには、お値段の方は少々お高くつきますが、どうしてもこの正金箔のお位牌の方がお上品でござりまして」

貿易の失敗談を隠居持ち　鉄洲

「そうして亜米利加へ金魚がどん〳〵行きかけたさかいに、こらよつぽど亜米利加人は金魚がすきやと思うてな、よう し、そんならわしの方にも考へがあると、注文受けてた白絹布に、今で云うサービス、其頃の勉强しときまつさと云う奴で、全部「金魚のもよう」を入れてどんなもんやと送つてごましたつたんや」
「喜びましたか」
「さあそれがよろこぶどころのさわぎかい」

知らないと答へられない地位にあり　三郎

「ね、課長さん、萬一平價を切り下げた場合はどうなるんですか」
「何ッ！　ヘイカをキリサゲル？」
「はあ？」
「はつ〳〵〳〵、いや、平價の切下げか、うむ、そいつあなか〳〵むつかしい問題でねつまりそのなんだね、而し君說明して聞かせてやつてもいゝが、勤務中に餘談を持ちかけて來ちや困るね」

獨立をした子へ母のまだ貢ぎ　曉明

「此の一萬圓の爲替どこから送つて來よつたんぢや」
「あゝそれ」
「なんやお前のんか」
「へい」
「又伜へ送つたるのやろ」
「すんまへん」
「いつまでもどいくぢなし奴が、大学迄出て居くさつて、女房と子供一人位ひやう養ひさらさんのか」
「へい、せやけんどなにしろこんな時節だつさかいに」
「だいたいお前があますぎる」
「すんまへん、そんなら、これ、もう送つてやるの、やめときまつさかいに」
「やめいとは云うとらん、今日び一萬円位ひの端た金を送つてやつたところがどれ程のたしになる、しやあない、もうこれつきりや云うて、もう四五萬円送つといてやれ、ほんまにしやあないがきやで」

あの人のどら聲それが嬉しいの　幽王

「男女同権や云うのに、あんたとこの御主人、ようまああんたにあないにがみ〳〵云ひなはるこつちや」
「へいな」
「ほんまに　おさつししまつさ」
「おゝけに、今日も又あんた」
「どなりつけられなはつたんかいな」
「おのれの様にいつも〳〵家の内にばつかし引つこんでくさつてぢめ〳〵さらしとると俺迄いんきくさい云うて」
「まあ、ひどいことを、一つぺん警察へ願うてやりなはれな」
「へい、どこえなと行つて、ちと遊んで來さらせ云うて」
「えゝ？」
「三萬円投げつけられましてん」

溜息を尼僧かくさぬ桃の緣　栞

「あゝ桃の花が綺麗に咲いて春やと云うのに、つまらんこつちや、わたえは又何んと思うてこないな尼はんやないかいに成つてしもうたんやろ、しようもない、こないなあほげた姿に成つて、なんぼなむあみだぶつをとなえてみたところうで、戰死しなはつたあの人が生きかえつて來やはるわけやなし。
ふん、あほらしゆうもないあの頃、遺骨と結婚した軍國の花嫁の貞女のかがみのとおだてられたばつかしに、せや、今からでも未だをそいことあらへん、早う髪の毛のばしてダンサーか闇の女に成つて、一つぺんうんとあばれてごましたろ」

二号には二号の理窟生活苦　みのる

「そない云ひなはつたかて、日に莨だけでもピースが四つ要りまつさかいにこれが二百円だつしやろ、それからあんたがとや角云ひなはるさかいに女中をいなしてしもうたお蔭で、三度の御飯を裏口屋から運ばせせよりまつさかいにこれが又なんぼしまつしても日に三百円要りまんね。只喰べるのと莨代だけで日に五百円要りまんねやで、それに月三萬円やなんど貰うとつてどないしてやつて行けまんねあんたもおんなぢ囲うておくんなはんねやつたら、わたえにこんな世帯の苦労ばつかしさゝんと、ちいとのんびりと暮らさしておくんなはれな」（終）

アメリカの駆虫薬
★十二指腸虫
★蛔虫
腸内寄生虫
アメリカ薬局方・四塩化エチレン
コメット
テトレン球
岡田製薬株式会社
大阪　東京

ニキビ
にきびとり美顔水
桃谷順天館

喫茶 みどり
清談・商談・お待合せに
みどりでの商談
運が向いて來る
上六交叉點西北角

柳界浄化 座談會

主催 大阪柳界革新委員会

最近大阪では「川柳まつり」事件が勃発して柳界の空氣を尠からず混濁させられたので、柳界浄化のため大阪柳界革新委員会が結成され、十月九日夜座談会を開催した。早くも骨抜にされて当夜欠席した委員もあつたが左記の諸氏が出席した。

橋本綠雨（大阪市交通局川柳会）高鷲亞鈍（川柳雜誌社）武部香林（川柳不朽洞会）中島生々庵（川柳不朽洞会）清水良祐（柳想社同人）麻生路郎（川柳雜誌社）―いろは順―

「川柳まつり」事件の眞相を語る

A・私は案内狀を見て、しまひまで読まないうちに腹が立ちました文面に、番傘四十周年に相当する時に当り、大阪市主催第一回「川柳まつり」を開催する、つまり「川柳まつり」を番傘四十周年の行事とするといふ意志があり〳〵と出てゐるんですからね。そんなものに、市当局が予算を出していゝものか、又川柳まつり準備委員会なるものが大阪のまつりをするのに予算を取りながら、各地に一口百円（幾口でも）の寄附を求めてゐるのです。それが番傘社の催であれば各地へ寄附を求めるのもよかろうが、いやしくも大阪市の主催であり、大阪で大阪の爲のまつりをするのに、各地に寄附を求めるなんて大阪の恥辱ですよ。不足が何十万円であるか知らんが大阪の川柳人が出せない事はありませんよ。それで大阪市当局の意嚮を聞きに行かうと思ひましてね。市政の方面としては市会議員の高貴傳三郎氏に、予算問題の批判をうけたところ、「市の公金を一つの團体のために使用することは許されてゐないから説明を求めるべきである」と云ふ意見でした。又川柳の方面では麻生路郎先生に批判をうけたところ、「僕はそんな問題には触れたくないが、君の意見は正論であるから、一度市当局の意嚮を質すのもよからう」との意見を得たので、高貴市議と中岡三吉氏（柳想社同人）と私の三人で樞渡社会教育課長（前文化会館々長）に面談しました。ところが市の方では「いや、それでは私達の意図する所と違つて來てゐます。早速廢案にします」と云ふ話でした。だから市の方はよくわかつてゐるんですよ。

E・番傘自体が頼み込んだんですか。それともボス的存在でもあつたのですか。

A・文化会館の一吏員と水府との結託でデッチあげたのです。そして新任の館長に押しつけた訳で、文化会館の催なら市の主催だといふところへもつて行つたのです。

B・僕が、柳想社で水府君に出遇つたところが、イキナリ川柳まつりの挨拶とか選者とかをたのんだ郵便物が届かなんだといふ弁解だつた。出したのかも知れんが來ないことは事実だ。この通り出したのですと各地から招く大家の費用の予算を書いた紙片や、鉛筆で走り書の依頼狀の写しのやうなものを示されたので、そうかれ、僕は大阪で柳社を主宰してゐるんだし大阪の一市民だよ。市の主催の川柳まつりに東京あたりから、およばれで來る川柳大家と同様の扱ひはどういふ訳かれと云つたら、水府君は変な顔をして、例の髪の毛をむしりながら、矢張り郵便物の届かなかつた弁解をクド〳〵と云つてゐた。僕は「もう郵便物の着不着なんか問題ではないよ」と云つた。それから柳想社の北人君にすゝめられて、奥二階へ上つた。二階で北人君や蒐杵郎君と同座した。その時に、水府君も番傘々々と自分のことばかり考えてゐるので随分頭が悪くなつたものだと氣の毒に思つたので、こん度の大阪まつり事件の拙劣な結果に反省して誠意を示し給へ、少しでも弁解がましいことを云はず、何処までも誠意を披瀝して、うまくしうしうすることだといろ〳〵忠告したが、一切は耳に這入らなかつたらしい。「しかし費用も要つたし、地方からも來ることになつてゐるので、四十周年記念の大会を天王寺でやることになつてゐるから、やらしてくれまへんか」と云ふことであつた。「そしてあんたも來てくれまへんか」と云ふことであつた。「番傘の四十周年の大会をやるのは君の自由だが、今度の事件を解決しておかないと、大変なことになりやせんかな」と云つたが、水府君は「兎に角來とくんなはれ」と云つて、そそくさと一ト足先に帰つた。あとで「自分とこの会をやるのにやらしとくんなはれとたのまんならんとは」と云つて、北人君等が笑つた。この時の話に、僕はこんなことを云つた。「過日砂人君に出会つて意見を聽かれたが「川柳まつり」をどうしてやらうかと云ふことなら意見も述べやうが、君等が勝手に運んでおいて、やれんやうになつてから意見を述べたところで仕方がないぢやないか。君等がゐて、どうしてこんな拙いことをやつたんだ。大体市などの主催で、ものをやると云ふ場合には各社の代表者を市長の名でもつて招いて懇談的に話をすゝめ市としては予算は幾らく、会場はこれ〳〵を使つてよろしい、しかし会の方法は各位がよろしく相談してうまく運んでいただきたいと云ふのが定石だよ。それを一社で私してうまく行く筈がないぢやないか」と云つたと話したら水府君は「イヤそうじやアないんですよ、こちらから頼んだんですよ」と意外の話だつた。

こちらから頼んだのだと聞いて呆れてゐると「文化会館の堀江某が近くやめるに際して置土産として、とりはからつたわけです」とのことに、いよ〳〵あきれたのです。それは封建時代の役人のよくやつた手ですからね。これでA君の話と合つて來るでせう。

つまり、番傘の四十周年の大会をしたいが昨年から会場難で困つてゐた。そして文化会館の堀江某に頼んだところが、そりやいゝ事があります。今市の方に予算の余つたのがあるから金をつけて貸してあげませうと云う話に水府君が飛びついた訳です。そこでホントの主催者と、仮装の主催者とが、こんがらかつたのです。

E・会場は手に入つたが番傘の四十周年を大ビラにうたへなくなつたので番傘四十周年の記念すべき、この年に、川柳まつりと云つた風に大きな頬冠りをしたわけですれそれでは川柳人の在り方を全然考慮に入れてゐないのですね。

A・イヤ、それがですよ。水府と云ふ人は川柳の本山は俺とこだと云ふ思ひ上つた考えが頭にこびりついてゐるからですよ。だから、人が本を出しても大きな会をやつても苦々しいんですよ。

E・文化会館にあつた短詩系の研究会も全部解散させられたそうですれ。こん度の事件が祟つたのだつたら、俳句や短歌もそば杖を食つた訳ですれ。市当局では川柳まつりを企劃した際に各社で仲よくやつてくれるやうにと言はれたそうですが……。

A・ところが、それに應じなかつたのです。

F・最近番傘の主要部の人の話からも、それに似た話を聞きました。共同だと、今までも例があるがうまく行かないと云ふ様なことを云つたのだそうです。この企ては数ケ月前から出來ていたんでせう？

A・無論そうですよ。

F・では、あのオメガハウスに於ける二次会の和やかな空氣に対し

て水府氏がむつくと立ち上つて、路郎氏は還暦の祝をされた。柳想は正に誕生せんとしてゐる。番傘は四十周年に当つてゐる。こう三つ揃ふ事は滅多にない。此時にあたつて私には斯う〳〵いふ腹案があるのだ位に出てくれば、共同の成立たぬ筈がないんですがね。発表には絶好のチヤンスでありながら一言も喋べらず、腹に一物を持つて腹の中で舌を出しとつたんだらうな。

A・川柳まつりの話はオメガハウスの会以前に薄々聞いてゐました

F・八月号に発表してるからね。

A・路郎氏の還暦の時に川柳生活四十五年だつたが、番傘では社の四十周年で対抗的にやるんだと聞いてゐました。私はなか〳〵やりよるなと思つて見てゐたんですが出て來たのが、あの案内狀でせう。もつとあからさまにやつて來たらこんな事はなかつたのにと思うと残念です。折角川柳に役所が力を入れてくれたのに、川柳人の私がぶつこわさなければならないことになつたのですからね。もつと大きく大阪柳界の事を考えれば相談の仕方もあつた筈ですがね。それをしないのは利己的だと云はれても仕方がないですよ。大体番傘の発展は川柳の発展だと思つてゐるんですからな。

E・錯覚ですよ。

A・むしろ思ひ上りですよ。

B・あの人たちの神経は、川柳まつりをやめさえすれば、それでしまいじやないかと云ふ考え方らしいが、僕は物事をそう簡單に考えられんね。なるほど川柳まつりはやめれば仕舞ひかも知れんが、市当局が今後川柳人を信用しなくなるといふ、あと味のわるいものが残るといふことを考えないのかと思ふね。番傘の人達に云はせれば暴露した方が悪いので、そうでなければその儘やれたんだと云ふ考えかも知れんが……。

A・そうですよ。そんな頭なんですよ。

B・しかし、その原因を作つた方が悪いので、すべては番傘の責任ですよ。私はいつも思ふ。川柳を何んのためにやつてゐるのかといふことをね。川柳のために、欺瞞行爲をやらなければならない、柳友にいろんな迷惑をかけても、自分さへよければい丶と云ふやうな行動に出なければならないのだつたら、私は川柳をあつさりやめてしまいますよ。せんじ詰めると番傘が、市の信用を失墜したことは全川柳人の顔に泥を塗つたことであり、大阪柳界の協調を破つても、自分達さへよければい丶と云ふ道義に反する行動は大阪柳界にとつて憂慮に堪えない。イヤ大阪柳界だけでなく、他地方へも類を及ぼすことは黙視出來ない問題です。

A・そうです。こん度のやうな流義で地方を引張つて行けば、目隠しされた番傘系の地方は悪くなる一方ですよ。氣の毒なものです。

E・進出には手段を撰ばないと云ふやり方なんですね。

B・そうです。川柳まつりの欺瞞政策がバレたので、謹慎するのかと思つたら、すぐ、頰冠りをとつて、今度は番傘四十周年全國川柳大会と、來ましたからね。そして承諾も得てゐない他社の大家の名を連られて、堂々と案内狀を発送するんですから、ムシロ壯觀ですよ。R社のK君曰く、大家連の名を並べるのは、投句料稼ぎですよと痛いところを衝く。或はそうかも知れない随分となめた話です。

F・火の手が上つてから向ふのやり口はどうです？

A・川柳まつりを取消されたが、何かやりたいと云ふので、今度は川柳まつりの正体である番傘四十年記念句会に変更した訳ですが、川柳まつりに対する反省はしないで、四十周年に切り変へたと云ふ陳謝狀を小ツぽけな印刷物で出ししかも四十周年記念句会に承諾も求めずに出場講師を発表してゐるのです。

F・私はあの陳謝狀の字数を数へて見ましたが百七十字あつた。(笑声)それも川柳まつり事件の陳謝狀でなく、記念大会へ切り変へたことの陳謝であつた。それも大会案内に同封してある人と、ない人とある。私が砂人君に、そのことを云ひますと、それは発送者の手落ですと云はれた。しかし私の知つてゐる範囲だけでも同封してない人が大分あつた。そんなものは知りませんと云ふ人と又番傘の案内には、うちの先生の名が出てゐたので、あれはもう解決したのだと思つて兼題を作つてゐますと云ふ人もあつた。それで向ふの云ふのにはあれでいけませんか？と云ふのです。問題になりません。そこには少しも誠意などは認められない。我々を非常になめた態度である。我々はこれ以上なめられに行かないと云ふので、不朽洞会川雑関係者は番傘の会に不参と云ふ決議をしました。又うちの先生をなめさせてたまるものかと云ふので先生も出席してもらつては困ると云ふ決議をした訳です。

A・我々は軽くあつかはれた訳です。

F・あの陳謝狀にしても正直なことは少しも書いてない、文部省から官公廳への通達で止すと書いてあると云ふことは通達がなければやつてゐたと云ふ事になる。

A・処が、その通達は、私が市役所へ行くよりも、ズツと以前に來てゐたので、通達が理由ならもつと早く中止してゐなければならないのです。

B・ところが市当局はそれを理由としてゐないのです。市は我々の考えてゐたものと違つてゐるから中止したと明言してゐる。

E・陳謝文には、はからずも文部省から通達が來たから止めたと記してあり、現に私のとこへ來た番傘の人が通達が來なければやつただらうと云つて居る。その何処に陳謝の誠意があるのか。

A・うるさい奴は軽く扱へと云ふ訳ですね。

E・今更反省なんか求めても駄目ですよ。

B・革新委員会から全國柳人に発送したハガキを営業妨害だと云はれたが、番傘の会へ來るなとは一行も書いてない。

C・誰です、そんなことを云ふのは？

B・柳想社のH君だよ。番傘と柳想社の二枚羽織を着てるので、番傘のために弁じたつもりらしいんだ。柳友が來てくれても、相携えて行けぬので、氣まづい思ひをさせてもいけないので、そのことを前もつて詫びてゐるだけなんだ。

E・さうです。ハガキを出しておけば、來たければ予定の宿泊を他へ変更されるので、営業妨害ではない。

C・営業妨害であつてもい丶ぢやありませんか。営業ではないのですから……。

B・今度は、大会の委員長だと云つて、近江砂人君から大会の案内と、百七十字の会の変更文彼等の云ふ陳謝文とを同封して、それに手紙を添えて、今度の大会へ來てくれるなら、薄謝を幾ら〳〵出す十五分程講演して欲しい。演題を知らしていただけば直ちに送金すると書いてある。私はこの手紙を見て侮辱を感じた。私は四十周年の大会へ出席するのなら、こちらからお祝をもつて行くつもりだつた。しかし、私の考え方が間違つてゐると云ふ人もあらうかと思つて、私はそれ等の書類を揃えて、不朽洞会の理事長に見て貰つたら私と同感だつた。砂人君は私を侮辱する積りではなかつたのであらうが、常に金さへ出せば、どうにでもなる人たちと、つきあつてゐるのであらうと善意に解釈しておいた。この人達は先づ、こんなとこから反省しなければならないと思ふ。

C・水府も馬鹿なら、同人も馬鹿だ。

A・傳染るのですよ。(笑声)

C・馬鹿だし、川柳も下手だし…

A・それもうつるのだ。

C・兎に角、水府を隠退させることだ。こういふ柳界をみだすといふ人は他には居ないのだからね。徹底的に暴露してやるんだね。番傘の人でも知らぬ人があるのだから。

A・番傘では一寸うるさい事を書いたらすぐ削るので、い丶作家はなくなるのです。

B・そうだらう。番傘では僕等の知らない作家が選者をしてるね。十二月号に水府と葉香郎、一月号に水府と乙鳥だ。

A・知りませんね。

D・やゝこしいな。

C・僕は南北と云ふ人は知らんが水府と同じやうなんぢやないですか。

A・南北氏は心から番傘と喧嘩して出た人です。今度のことでも一番先に番傘をぶつつぶせと云つたのですが無力なのです。

B・柳想の同人会で、番傘をブツ潰ぶせと絶叫したそうぢやないですか。それで番傘の大会へは出るそうですよ。砂人君の話では。

E・鼻ぐすりが利いたのかな。

(笑声)では、この辺で打ち切ることにいたします。御苦労さま。

近作柳樽

龍宮のやうに和歌浦灯がともり　和歌山宏方
ベチヤ〳〵〳〵女は下りるまで喋り　同
口紅も濃く接吻を待つばかり　同
レントゲンあの娘の写眞には見えず　同
安心は院長さんに診て貰ひ　同
病院はお近いうちにとは言はず　同
絵の中の人とは知らず筏乗り　同
輪タクにふんぞり返へるはたちだい東京都三星子
サボツたりはらんだりして自由です　同
ブルジョアに替りおかみに搾られる　同
天が下知らぬ事なしカラツケツ　同
儂のなやみは産科医の男前　同
聽診器或る日お米と同居する　大阪府水滴
二階借る約束で賣る末亡人　同
心持ちされど百円からしい　同
幸福な二人に天の川きれひ　同
夏時間まだ〳〵見えぬ天の川　同
死んでやると言ふた男が生てはる　大阪市ひさみ
男ごろ〳〵としてヂヤガ芋に似る　同
捨られた日もあり浮世面白し　同
一生を二号で暮す氣の化粧　同
簡單に愛の言葉を見つけて來　同
ゆがへりをよびこむ家で花がつき　上野市辰子
思いざしの取次をして舞妓ませ　同
流行妓同じお茶屋でもらはれる　同
妓の肩をトンビがだいた最合傘　同
喀血へ旦那やさしく遠去かり　同
レヴューガールの様に吊皮（さつこゆれ）　岡山縣弓削平
墓穴へ六法を踏んで入りにけり　同
片足で蛭を落して田にも慣れ　同
失業の良人きびしき蠅叩き　同
夏時間晝寝をしたい顔が寄り　小松市茶佛
起重機のうなり見学ちぢこまり　同
笑ふさへひもじき顔よ靴磨き　同
どの道も駄目急援を苛立たせ　同
長男は本の通りに育てられ　岡山縣七面山
月給に背いた様な太りやう　同
弟と言つて女は他人めき　同
家出する事情を猫に話しとき　同
七夕の星より西瓜先づみつけ　今治市伶人
クリーム屋自分も一つついで食べ　同
藝術かエロか裸が金になり　同
七夕があきれる様な願ひ事　同
めし時へラヂヲ衞生講話する　岡山縣笑泉
理想高くすでにオールドミスとなる　同
自轉車屋に宣告受けたタイヤです　同
商賣繁昌支店一つも持つ暮らし　同
旅の町夜店の通り見て歸り　今治市一風
無理矢理に踊らうといふ手を摑み　同
タイヤ代寢ていた方がましと知り　同
蓄電池結局ちびてゆく身なり　同
保健所へ行けばお医者も夏休み　大阪市千舟
晝飯のつく就職をすゝめられ　同
御飯ですナンバのパンと云はず呼び　同
引揚者燒跡ばかりおしへられ　同
配給日他所の世帶も案じて見　今治市文庫
土砂降りに手を拔いたのが知れるなり　同
洋裝の脛から下が物足らず　同
一泊をたのむつもりの土産物　同
牛とたてば牛の匂ひも秋のもの　愛媛縣旭童
思つてた通りインクビン倒れ　同
秋の恋去年おとゝしさをとゝし　同
意地張ればひがんだ奴とさげすまん　同
女同志他人の恋など評すまい　大阪市梨里
あの頃を語る瞳は空にあり　同
ロマンスなんてあつさり語る廿八　同
金銀の誘惑夜の灯が淋し　同
秋晴れを何処へ空車のまゝの貨車　熊本縣夏生
その子又やはり月給取になり　同
傳票の裏で恋され恋をする　同
今日浮かぬ顔で歸つたミスポリス　同
封建的という語でなにもかもかわり　鳥取市日満子
赤なら赤でえゝのになんでかくすんや　同
我が家また屋根がおまへ如く洩る　同
政見に女將キセルを持ち直し　大阪市のぶを
いつからの埃か大佛白く座し　同
鐘をきゝぞうりに替へた三笠山　同
記念写眞の様に撮れてるスリ一味　横浜市万年
その値にもやつと馴れるとまた騰り　同
百姓が算盤を持つ候となり　同
蚊帳に蚊を入れて子供ら寢靜まり　新居浜默江
怪談へ蚊やり火燻りつゞけをり　同
伸ばす子の手を風鈴の舌が逃げ　同
海の子を叱りつかれた父の声　大阪市草々
またきざな眼鏡振られる役をする　同
髪を褒め子を褒め登錄願ひます　同
唸つてる独樂の靜かな立ち姿　大阪市葉光
革靴のほしい子閻値知つてゐる　同
胡瓜のイボの痛い朝露　同
役員の前歴拾ひ屋買出し屋　兵庫縣正司

住みよさはやはりもと居たガード下　同
閉店のベルで下つた切西瓜　同
さあ御飯だよと皆んなでパンを食べ　吳市甦光
昔出た月もなつかし盆踊り　同
陰口も知らず口紅通り過ぎ　同
茄子一つころび子緣のない夫婦　大阪市花代子
慾言へば母へあまへて見とうなり　同
向きあへば矢張り男としての口　同
指先がいつしか觸れる恋なりき　大阪市定美
お化粧をして薄情なひとゝ逢ひ　同
夏やせか恋か目立つてやせてる娘　同
遊說と言ふに溫泉地を目差し　岐阜市周峯
あかこすりこすり浮浪兒母を恋ひ　同
還暦のそろ〳〵邪魔にされるなり　同
ママゴトは此処でと地震へ親心　石川縣光郎
青空の炊事へ一家圓く居る　同
兒の理想モウ大將にはなりません　同
傳統を誇る老舗の賃加工　高槻市丁路
皆樣へ奉仕の品が腐りかけ　同
ヤヽ强く言へば涙の目でにらみ　同
切張りの外きりぎりす鳴く哀れ　松江市孤呂二
世に負けじこの細腕を賴り來し　同
殘暑きびレツーストライク・スリーボール　同
氣に入りの看護婦氣障な奴に惚れ　大分縣表情
草野球吾が子が打てば夏涼し　同
ネツト裏校長助役医者巡査　同
孫をあてがわれて大器晩成哀れ　長野縣柳兒
子に折れて親の笑ひも淋しまれ　同
貧しさへ子宝等と痛い世辞　同
皆賞めるおまわりさんはすぐ変り　石川縣義風
人並に育てゝもらいすぐ忘れ　同

口笛でなんでも吹けてこましやくれ　同
もう秋の風を吹ふてゐる指輪　兵庫縣花子
絵の樣に母と見てゐる有馬の灯　同
財産を捨てたらいつそ樂しかろ　同
氷屋が豆を仕入れて秋近し　愛知縣吐平
セパートへ口笛吹けば囓まれそう　同
師を訪へば中折帽も元のまゝ　秋田縣夕帆
御心配無用女で食うてゆけ　同
淪落の旧主へ濟まぬ農村法　新居浜虹二
とぶ〳〵と子の小便を嬉しがり　同
見たら破れと領收書貰つて來　登詩夫改め西宮市鈍妹
遠慮がちな謠ひやうにて養子なり　同
むかしむかし白米に等級があつたげな　大阪府松夢
戎橋エヽとこ恩師に見つけられ　同
読經しづか白髮に朝のたゞよひて　島根縣米市
補回戰外野の方から暮れかゝり　同
氣安めの言葉と知れど薄き粥　佐賀縣えいを
床上げの捨て忘れたる藥瓶　同
剃らずには居れぬ貧相な髭が生え　大阪市五郎
これだけの兄弟となり父母の墓　同
非農家と言ふ悲しみにナンバ喰ふ　神戸市美代子
妹はまだブイ〳〵を追ふ若さ　同
全快の後姿へ話しかけ　愛媛縣早百合
相手なき腹をたてゝるのに氣付き　同
白砂にころべば淡路とゞきそう　兵庫縣萬龜子
緣談を今日は本氣で聞く茶の間　同
塗下駄の艶が形見として殘り　山梨縣嘩子
人生に疲れた服をいたわる手　同
官吏です役得位あつてよし　大阪市三郎
スチームよ何時になつたら役に立つ　同
目のさめる樣に桃割立つている　和歌山惠風

ぐち一つ言はず夫の身を案じ　同
療養所婦人雜誌が見えません　宇部市粗影
箸持てば愛は己に反きたがり　同
四ツ折の百円札は見當らず　松江市快哉
大仰に驚いてやる子守なり　同
末亡人木魚の音がふと淋し　今治市滋路
くもの巣がかすかに光る露地の月　同
大胆に笑ひ人生縱に生き　大阪市小雅子
虹に似た其の情熱へ師を慕ひ　同
腕白をおだてすかして粉を挽かせ　高知市元馬
梨の味みなそれ〴〵の自我をもち　同
処女なりし頃の日記をなつかしみ　大阪市梅風
やけくそもチトてつだつてぼんおどり　同
大阪で儲けた話面白い　岐阜市巷歩
出駄羅目で食つてるものに友の易　貝塚市一郎
寢てる子を起した憎い蠅を追ひ　香川縣迷觀子
パン〳〵にされるタバコの咥へ樣　佐賀縣八笑鬼
家柄がマニキユアだけは止めさせる　大阪市良子
あげ卷に夕風そよぐ夏姿　大阪市葉菜子
手作りの西瓜切る前先づ眺め　大阪市康夫
墓詣りしてこの十年の変りよう　大阪市桃村
貧しさがさせたあの日の口喧嘩　福岡市朝綠
税務署員と口には出さず聞いてゐる　長崎縣鈍巖
納棺へあくびしそうな寢顏なり　大阪府哲水
天高く昔は馬も肥えたとか　名古屋まさを
醉うたとて何が樂しい世であらう　高槻市河童子
逢ひに行く樣に化粧をからかわれ　大阪府美智子
自惚れていやはりますわ馬鹿にして　大阪市ナミエ
新芋がとれて南瓜見捨てられ　大阪市晴夫
ナンバ粉のカステラを食ひ詩を作る　大阪府きはち
見くらべてやつぱりもとの店へ來る　大阪市きぬ子

川柳語原考（中）

——今日的意義と遡源的研究——

福田山雨樓

柄井八右衞門の雅號「川柳」が遂にこの短詩の名稱にまで轉化したことは、本人は元より或る特定人の運動や画策に因つたものでないことは勿論國民投票的な選擧や國技館の優勝額のような爭覇に基いたものでもないことは云うまでもないが、これがいつの頃から稱えられたかについて、故雜牛子や〇丸氏などが具さに調べられたところによると、一、初代川柳の歿する前年の寛政元年に出た黄表紙、京傳の「孔子縞干時藍染」には「かの川柳点の句に」とあるのに寛政六年に出た同じ京傳の「金々先生造化夢」には「仰向いて搗屋秋刀魚をぶつた食い、とは川柳の名句であつた」とある。寛政六年には柳樽二十五篇が出ている。僅々六年の間に「川柳点」より「川柳」に替つていることは大いに注目せねばならぬ。（註1）二、文化八年平田篤胤の「伊吹於呂志」に「川柳が句にも」云々とあり、文化九年の「悟道弁」に「また川柳に」云々とある、（註2）

三、川柳の名稱に就ては、正しくは川柳点前句附と稱したもので、又これを略して川柳点と稱したことは天明前後の洒落本などに多く見受けます（中略）それがまた「点」の字を省略して「川柳」と呼ばれる様になつたものと思われます前掲の「通詩選諺解」に依つて見ても天明の末年頃は「川柳点」というていたことがわかる。川柳と呼び始めたのは其の以後からのことゝ思います。（註3）

四、川柳点云々とか、川柳の句にとか、川柳の句にとか、川柳子がとか、それで世間に通用する形となつた。これはその時代の風潮とでも云うものではなかつたか。流行物に人物の名を代用する。これは今でもあるにはあるが、その時分は通な意味で自然発生的に巷間に流通する。そんなことではないかと考えられる。（註4）

五、川柳の名の出所。それは誹風柳多留が一般人に迎えられて流行し、一般人がこれを川柳点と持てはやしたものから、他の点者の選句までがその名の下に含まれてしまつた形で、世人は一切川柳点又は川柳で片付けて來た。これは一見簡單なようであつて中々重大な意味を持つものである。誰が命名したと云うでもなく、世間がこれを承認したことは、人心にぴつたりと來るものがあつて初めて行えることで、自然に流通すると云うものは無意味のようでその實、力強いものを持つてゐるからである。その名よりも其の實に共鳴を覺えるのあまり誰いうとなく、世間がこれを川柳と名づけた。一般世間は正直である。その實が、その精神が、世間の琴線に觸れなくては、こんな人の名を詩の名にするなどと云う變挺なことが人爲で行えるものではない。茲が柳多留を充分に檢討する必要を感じるところであつて妄りに輕視し、通過すべきものではない。（註5）

六、川柳点前句附を略稱して川柳点と云い、更に川柳となつたのは、東京帝國大學が東京帝大となり、更に東大となつたのと同じようだが少し違う。單なる省略法なら川前でもよかろう。川柳と云うからには少くとも初代川柳に対する敬意が表われてゐる。川柳その人が強く意識されてゐたことは見逃し得ない。漢然たる當時の民意の反映ではある

不朽洞会から

▼十月三日本社句会の散会後、川柳不朽洞を開催、川柳まつり事件に関しての経過報告、未解決のまゝの番傘の大会へは不朽洞会員及川雜関係者は不参すること、大阪柳界革新委員会へ委員を理事指名で参加させること等を決議、なほ不朽洞会費値上げの件が承認された。▼古川麹花麗氏（ホノルル）から九月十九日、廿五日、十月二日附のエアメールが次ぎ〳〵に來た。廿五日附のメールによるとあちらでは市電スト廿三日、コカコラスト四十日、電話会社スト四日、沿岸船員スト廿日と云ふ近來のスト攻めでまだ解決の見込みがたないそうだ。▼麗山雨樓氏（横濱市）は快食快眠倍重も十五貫あるので焦せらず快癒街道を突進してゐるとのことです。無理をされぬやう闘病されたい▲戸倉普天氏（兵庫縣）は九月十五日列車中で提鞄を盗まれ乳山羊講習会のノートを失はれたとのこと▼夾一笑氏（姫路市）は九月二十三日一家五人連れで墓參を兼ね復興博見物に來阪された一笑氏は僅の時間を割いて幽玉氏を見舞はれたそうだ▼岡本一平氏（岐阜縣加茂郡古井町に疎開中）多年川柳雜誌社賛助員であつた氏は十月十一日午後六時四十分入浴中腦溢血で永眠された享年六十三歳謹んで悼む▼木村孤浪氏（平塚市）は十一月五日出帆の船で冬の北海道へ旅立れるとのこと▼弘津柳慶氏（廣島縣）は九月二十四日から十月一日迄金津若松東山温泉で亭寳局職員組合大会が開催されたので出席された▼岩崎柳路氏は夏以來病臥されてゐたが去る十月三日午前一時に伊丹市下河原一笑の自邸で永眠され翌四日午后三時、同地の墓地で告別式が営まれ川柳不朽洞会有志が供花一対を霊前に捧げられた。当日路郎主幹夫妻と橋本綠雨氏が会葬さるゝの番傘の大会へは不朽洞会員及▼路郎先生夫妻は水谷竹荘氏夫妻の案内で十月十二日の夕、歌舞伎座の忠臣藏と重かたびらを観劇▼佐野卜占氏（八代市）は川雜八代支部の発展を計るためと八代川柳界のために、十一月上旬に路郎主幹を迎えて座談会を開催されるとのこと▼安川久智美氏（金沢）は八月以來、石引町の松原病院に入院されてゐる▼橋本綠雨氏（大阪）が明治大正昭和柳書目錄をプリントで刊行、二回目の補訂版であるこの次ぎには活字本として出す予定だとのこと▼川村好郎氏（大阪府）は夏以來社用で東京廿日間の宿屋生活で多忙を極めてゐられる

橋本綠雨編

明治 大正 昭和

柳書目錄

增補改訂プリント版

頒布價二〇円〒四円

大阪市東住吉区平野西之町八三

橋本綠雨

新会員紹介

十月

渡辺孫拙氏（大阪市）正
小田垣蝸牛氏（伊丹市）正
顧島正則氏（大阪市）正
藤田わたる氏（滋賀縣）正
富岡淡舟氏（大阪市）正
以上綠雨氏紹介
石原伯峯氏（廣島縣）正
久米雄氏紹介

が、之は藝術上からも理論付けられる。（註6）

七、安永九年川柳翁六十三歳の年、朱樂管江發行、川そい柳初編の序文には滅法外に柳を禮譜している。「多き柳の其中に平生柳の賞すべきは夕淺草新堀のほとり川そい柳のことなるべし、その柳のことの葉やわずかに俚語をもつてすといえども敢て一ばいを述るにたれり、故に自然になびきて世の風俗をさとし、もつぱらなびきて古今の人情に通ず」また玉柳の序文に「酢いもあまいもぐい呑みの一句をきゝて万句をさとるも柳師のごとく也、しかも花實おのづからそのうちにあるはこの道のとく也」「是に題して、こと葉の玉柳としかいう」極めて自然に決定されたのが面白く、川柳翁の人德の現れとも云えるであらう。高ぶらす飾らすなびく川柳。それが開祖の号であり、私達を慰めてくれる川柳である。（註7）

八、どうして川柳の名稱が独立したかと申しますと、これは前にも申しました通り柄井八右衞門の筆名でありましたのを、同選者の偉大な人望、選者としての尊敬、追慕といふ意味で、前句附より独立したものを斯く名稱したのであります。それは彼の萬句合の曆刷りの中から、名玉を拾い出して誹風柳樽を編著した呉陵軒可有が、川柳翁の諸美者であつて、柳翁とか川叟とか尊稱して、前句附の選者の神様と崇拜したから、遂に其の独立した前句附に、いつとはなしに川柳翁の選をした句であるから川柳であると一般に普及さしたのであります（註8）

要之、川柳と云う名稱は既に誹風柳樽の出ていた當時から用いられていたし、明治十年の國々珍聞にも川柳と稱している。この十七字が齎らす特有なユーモアに對しては、今日のジャーナリズムも古川柳にとか、川柳子はとか云つて、そのユニークな存在を尊重し、珍重し引用しているのである。今日大多數の人々は柄井八右衞門の俳号が轉化したものだなどと云うことは知らないで一圖に川柳と云う名を愛稱している。問題はしかしどんな川柳がよいのか、どんなに優れた川柳があるのか川柳は何を詠つているのかと云う文學的な探求に對して無頓着なところにある。

川柳の研究に興味と熱意をもつものは、世間が古川柳を珍重し愛誦する意を汲んで、ひそかにその源をさぐり、その足跡をしのんできわめ正すところがなくてはならぬと思う。

（註1、雞牛子の川柳の名称、三味線草、昭和十四年六月号。註2、同氏の川柳の名称について、ふあうすと、同十四年七月号。註3、故花岡百樹翁の川柳相談所解説、番傘同十年四月号。註4、紋太氏の川柳の進路、もめん同十七年六月号。註5、同氏の川柳の名を愛す、ふあうすと、同十四年二月号。註6、山路閑古氏の如是我聞、三味線草同十四年五月号。註7、故小田夢路氏の天下に誇る川柳の名称、番傘同十六年九月号註8、木村半文錢氏著川柳作法。）

紙業界の覇者フタバチエーン

藥用・化粧品用・あらゆる紙器

特殊紙器工業株式會社

紙カップ及食堂用紙製品

フタバカップ株式會社

大阪市阿倍野區晴明通一ノ四〇　電天下茶屋 2802 2808

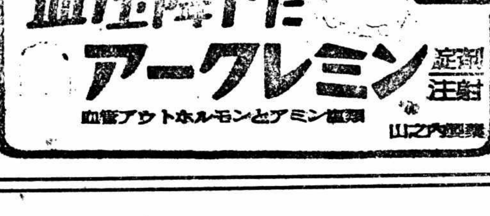
あらゆる印刷

凹凸印刷紙業株式會社

大阪市阿倍野區松虫通一ノ一六　電天下茶屋2391

動★静

▼本社では十月三日午後一時から一運寺で「秋に親しむ川柳会」を開催した▼川雜浜寺支部は十月廿三日午後六時から長德寺で開催、路郎主幹出席、次回からは生々庵居で開く由▼川雜阿倍野支部は十月十六日夕六時から例会を開催、路郎主幹出席▼扶桑金属川柳会は十月七日午後四時から開催された▼大阪遞信病院川柳会は十月二十一日午後二時から三階図書室で開催▼大阪市交通局川柳会秋季大会が天王寺運輸事務所樓上で開催以上何れも路郎主幹出席▼関西配電篠山配電局句会が八月十日午後四時から開催され偶々出張中の関西配電本社の清水美朝氏が出席されたとのこと▼ふしみ川柳会は十月六日捕物帳、十一月六日は林湖郁氏の寫眞で作句される由▼米村あん馬氏（松江市）は句集「四十年」を十一月早々山根書房から出版される由▼名古屋すげ笠川柳会が十月廿四日創立句会を開催された▼野村味平氏（石川縣）は那谷寺觀音から通信に接した▼八木辰子氏（上野市）十月末東上される由▼藤村雅光氏（不朽洞会賛助）の詩集「萄葡の房」出版記念会が十月十九日午後二時から大丸四階水曜クラブで開催され本社から路郎主幹が出席、感想を述べられたとのこと▼前田伍健先生句碑除幕式兼縣下物故川柳人追善大法要記念川柳大會が十月二十四日午前九時から愛媛縣越智郡龜山村高竜寺に於て開催される、句碑は「景色よし花よし史よし高竜寺」主催は津倉川柳吟社▼米三翁古稀祝賀川柳が下関の川柳人によつて募集されてゐる。題は「古稀」「馬関名物」「動く」各三句、創作十句、〆切十一月十九日下関市上新地町小門鉄道官舎國弘半休宛▼清水旺夕氏（岐阜縣）川柳忌日に岐阜市で濃飛川柳クラブ（鵜籠と花火の大乗的事業形態）によつて縣下新人川柳大会を開催、新人選を強行した句会を試みたとのこと▼原達子さん（西宮市）は十月二十一日結婚、静岡縣岩淵へ移られた▼狩野燕子氏（姫路市）は十月二十一日に三朝温泉から「方言も刻々変はる汽車の旅」の句信を寄せられた▼深井凡々氏（奈良縣）は十月中旬奈良縣國民健康保険團体連合会参事に奉職された▼六島濤明氏（熊本市）は名古屋にゐられる令息に急用が出來たので十月十七日頃上阪されるとのこと。▲National Shopでは川柳を募集することになつた入選作品には相当の稿料を呈するとのこと、商賣に関する句一人五句以内、選者は麻生路郎先生、毎月末日締切、大阪府北河内郡門眞町松下電器産業株式会社内ナショナルショップ編集部宛



不朽洞会員諸兄並に諸姉に

不朽洞会理事長
中島生々庵

不朽洞会員諸兄並に諸姉

お互に何かと忙しい昨今は御一同と集つてゆつくりお話し合ふ機会にはなか〳〵恵まれ難うございますので紙面を借りる事に致しました。

ご存じの通り先般大阪市主催川柳まつり事件に就いて取つた終始一貫不信な態度に向つては皆様におかせられても定めし柳人として耐え得られぬ悲しみと憤りと淋しさとでひし〳〵と胸を打たれられた事とお察し致します。余りにも不仁義で非友誼で汚常識なこの態度を或人は「ボス」型だと云ひました。或人は「番傘」にあらずんば川柳でないと云ふ思ひ上がりだと評しました。或人は「番傘」崩解の前夜劇だと断じました。然しそれが何であらうとも結局は川柳人としての人格、素質、修養等の然らしむる結果に外ならぬ事は明かな事実であります。従つて川柳の一連につらなる私達にとつては迷惑至極であると共に悲しいとも寂しい限りであります。

不朽洞会員諸兄並に諸姉

然らば何故に私達の上に「番傘」がかくの如き辱しめを敢えて與へたか。何故にかくの如く私達を敢えてナメ様としたのか。悲壮な冷静さが燃え上がる公憤焔に包まれた私自身をやつと支えて呉れました。私はこう考えたのでした。辱しめた相手、ナメた相手のその不信や没常識もさる事乍ら私達自身、お互の結びつきに於て、めい〳〵の精進さに於て、力弱さと云ふか隙きと云ふか乗ぜられる素因があつたのではないか、それが「番傘」をしてこうした「あやまち」を犯させた誘因となつたのではないか。例へば何時も無人がちで戸締りの悪い家にはコソ泥が誘導され易いし、何時も腕ッ節の強い大男が多数揃つて居て戸締りの厳重な家はめつたに強盗でも伺ひ難いと云ふものです。私達自身こそ強く反省すべきものがこの辺にあるのではないか。私はこう考えたのでした。

不朽洞会員諸兄並に諸姉

やりませう。大阪川柳界浄化のために力強く立ち上がりませう。それに就いて他を省みる必要はありません。私達不朽洞会員一人一人が先づ以つて柳界人格者の第一人者たるを期し手を固く握り合ひ乍ら朗らかに明るくまつしぐらに柳道へ精進しようではありませんか。之れがとりも直さず柳界の浄化を実現するための或は柳界の水準をより一層高めるための要素へ直結する正道であると信ずるのであります。

不朽洞会員諸兄並に諸姉

私達は路郎先生に対し心からのお喜びを献げて還暦のお祝を先月申上げたばかりです。それなのに私達不朽洞会が弱体であつたと云ふ理由のために先生にこうまで非礼を及ぼしたと云ふ事になれば何としても申訳けない限りではありますまいか。他社の様に同人組織なればとにかく師を憶ふ門下生としての皆様の御胸中をお察します時又しても骨が鳴る様な気が致します。この際先生のお心持ちを多少でもお慰め申上げたいと云ふ思念は御同様切実なものがあると思ひます。然し一時の興奮にかられた軽々しい言動は慎しむべきで寧ろ世の物笑ひとなる恐れさえがあり「咽元過ぎれば」では一洙のナンセンスに過ぎません。然らばと云つて「臥薪嘗膽」等と云ふ暗い文字は我等のとらざるところであります。唯「忘れるな十月十七日」之れ丈けでよろし。そして自らの向上への忘れな草として毎年この日を期して不朽洞会主催するところの「柳人向上川柳大会」とでも称する年中行事を催したら如何。この様にして一年。二年。五年。大阪柳界は「川柳雑誌」を中心として本然の姿の花が咲き浮く朗らかな実を結ぶ事は火を見るより炳かであると確信するものであります。

限られた紙面に拙文よくその意を盡せませんが我が不朽洞会員に荷せられた責任が極めて大きなものである事を皆様に訴えたい微意がお判り下されば幸甚これに過ぎざるものなしであります。以上

默然人と私

姪子省二

無所得にして計画のたゝぬ境遇に陥つては悉く老妻任せ——朝鮮に於て死すべかりしに老妻の苦労で生き延びる。平素余り短册など書かぬ私が

死所を得て

松吹風か破障子

外一枚を默然人さんに送つた儘文信を絶つた。病床から引揚通知をした時、あれが絶筆だらうと思つてゐたと申越される其短册は岩崎柳路さん蒐集中に有るらしい。私が先きに默さんが後からといふ話合ひが入れ違つて、今や哀悼に寂しい日を過して居る。默さんの生立ちから知つて居る詩友は多くはなからう。数奇傳中の人だ。句は柳樽寺系的で比喩に富み示唆がある。六十六才に至つても衰へなかつたのは、心の置所があつたからだらう。

朝鮮に在りし日の書斎の障子は貼交ぜにしてゐた。默さん筆が二枚殘つてゐたのを老妻が持ち帰つたのは何んと因縁深き事だらう。それを急逝の報に接した日探し出した。

野菜が虐れた俎板が減つた

鉋の思ひ上りは石に叉がこぼれ

三月廿日附葉狀に「近作」とあつて廿五句許の中にも「鉋」の句が見出される処から察すると、これは自信タップリの作品らしい。

梅干が咲く小田原の梅が咲く

此句に就て、車窓から小田原附近の梅花に氣付き名物の梅干を聯想し句に纏めようとしたが……万策盡き「梅干が咲く」と大胆に表現……苦心惨憺の揚句作り得た時の愉悦は苦心を埋めて剰りある、と。そこで私は率直に

梅干が咲ふ小田原の梅が咲ふ

「咲ふ」は「笑」の古字だ。山笑ふといふ季題もある。「咲く」と「笑ふ」の相異の中に尊台と私の性格の相異が表示されるであらうか。互に此句を握つて今後の創作に精進致し度いと告白した。こんな親しい詩信を爲し得る老友を失つては再び得られない。

南無阿彌陀佛阿彌陀佛落る月

默然人

頴原博士の著書

福田山雨樓

昭和二十三年八月三十日頴原退藏博士が逝去された。日本の文学界はもとよりわが川柳界にとつても一大痛恨事である。

先生は京大文学部に多年俳諧史を專攻せられ、幾多の俊才を社会に出してゐられるのであるが、著書も多く今自分が記錄したものだけでも左のとおり二十数册に上つてゐる。(大体出版年代順)

仮名草紙、俳諧史の研究(共に日本文学講座、岩波書店)、俳諧史の研究(星野書店)、俳句歳時記(改造社、松涛青々共著)、俳句講座第一巻中史的研究法、享保及天明俳諧史、第二巻中俳風評傳篇宗因、西鶴、惟中、第四巻中俳論、天明以後の論爭、第六巻中俳書解說篇、撰集解說(改造社)、続俳句講

胃酸過多
胃痛・胃潰瘍に…
ノルモザン錠
45錠入
大阪・武田藥品工業株式會社

座第一巻中俳人評傳篇、未得その他(改造社)、俳諧名作集(江戸文学叢書第四編、雄弁社)、俳諧史論考(星野書店)、川柳雑俳書解題(川柳講座第二巻、宮田正信氏共著川柳講座刊行会)、校本犬筑波集(星野書店)、俳諧文学(日本文学大系第十五巻河出書房)、校註永代藏、校註胸算用(発行所不詳)、去來抄(旅寐論岩波書店)、芭蕉(日本古典読本第十巻日本評論社)、西鶴(弘文堂)、新訂芭蕉俳句集(岩波書店)、芭蕉、去來(創元社)、芭蕉の連句(河原書店)、蕪村全集(創元社)、芭蕉研究(発行所不詳)、江戸文藝論考(二省堂)、俳諧精神の探求(秋田屋)、江戸時代語研究(臼井書房)

秋雨夜語

加賀　前田義風

秋雨連日、水浸りの刈稻え、拾月十日第二次の早場米の歩は脆くも叩きくだかれた。私等の希望を灰色につゝむ雨、秋は春と表裏だ。ほしい米に不足勝ちな雨水だつたかつて日本一の大農だつた歌人庄亮は常に衆人より一歩前進して雇人もよく四十町歩の水田を作り扱いて知られた。我々は作句に作物に此の衆より前進する事を忘れてはならないと思ふ。ごく簡單な此の一事の実行すら忘たりがちである。恐るべし、恥べし。

病氣になつてはじめて健康の有難さがひしひしと感ごるゝ。遥暦を迎えられて愈々旺盛な路郎師の近業をみなほす私である。師がつくりつゝある歴史、私はそこに常に一歩の前進があつた事をみつめる。豈誰か一夕にして大成するものがあらうぞ。名人の名の冠せらるゝ迄の努力「今になり菊作らうと思いけり」呵々。学ぶべし、励むべし。

母の従妹がひんしの重態にある今は注射で露命を此の世えつなぎつゝある。村でも一番のわなりやであつた。だが病魔には抗すべくもない。数時間の生命になつても尚悟りの境涯に死を喜こぼうとしない。人間の最後のみにくきである。死してゆく身に、今一本の科学の粋も無駄にすぎない。しかし愛し子達は秒時をも母に求める。

そうしてその母も死をきひしてゐる様にみうけられる。人間と科学の闘争が尚数時間続くであろう。二〇ワットの燈下にうづくまる生物の苦ほしげなる呼吸、眞ツ黒い衣が皆の魂をわしづかみにして放さうとしない。秋の雨はかゝる重苦しさえひし〳〵としみとほる。

小雨となり風となつてきた人生の一頁を閉じる生命をみつめつゝ此の人に不滅の何物もない事を惜しみたい。藝術は不朽である。しかし誰しもがその藝術に没入する事は不可能である。私は今去りゆかんとする生命へ不びんなものを感じる、と同時に私が今此の様に若しなつたとしたら、私は慄然としていふであろう。

私は川柳の藝術性を叫んできたそうして論じつゝある。だのにもし私の今の此の生命を風先の裸火の如くかきけしてみるとせん。一体何が残るだらう。私の藝術川柳は空氣を握つてはなした様な、間のびして消失してしもう煙の如く果ない。川柳が藝術であるなしにかゝわらず、私の川柳自体がその場にも記憶にとゞまらない巾の狭まさと奥行のなさに驚ろくの外はない。私は川柳の藝術性を叫ぶ前に自身の川柳を藝術のレベルに引上げる事が急務だと思ふ。そうして何時なん時いづくの何処で此の露命を仮の世から精算されても悔ない川柳家となり少しは人様の目に記憶に残る川柳をつくる心がまえが一番私には大事の様だ。私は川柳家であると自負してゐる事が母の従妹の断末魔に相関連して頭が上らない情けなさに冷汗三斗する。

川柳家が川柳の藝術性を論じている様では川柳の藝術性は成り立たない。川柳が藝術たりうるかないかか第三者のきびしき擽によつて決せられると思ふ。私は路郎師の偉大さを思ふ。

課題吟　時間表

福田山雨樓選

一分の違いで睨む時間表　迷網子
たつた今出たとこらしい時間表　一郎
木賃宿に昔々の時間表　水滴
時間表かべにすすけた山の宿　竹荘
時間表通り動いて乗り遅れ　半休
時間表通りの汽車を乗り遅れ　笑泉
約束の女が見せる時間表　小楼
追はれてる女にせわし時間表　潮花
久々の母と逢う日の時間表　葉光
時間表めくる瞳に母の影　路三
時間表もうけぐちでもあるのんか　梅風
時間表も入れて忙しい儲け口　奇朗
雞の世話から起きる時間表　万年
時間表作業も入れて癒えてゆく　八笑鬼
パンと紅茶に時間表も美しき　鮎美
時間表メニューの横で古くなり　松雄
時間表待合室は穢なすぎ　茶佛
時間表賛否に困る案内所　水車
時間表我が故郷は北の涯　きはち
時間表もう富士山が見える頃　太路
栄轉の鞄の上の時間表　定美
忙しい手帳にはさむ時間表　竹荘
歪へ氣が落ちつかぬ時間表　松雄
時間表氣にしながらも猪口を受け　沒食子
時間表隣りは山え行く支度　三星子
時間表ヒッケルえもう黄昏れる　伊太古
時間表もう間に合わぬ音で閉め　路三
時間表待つ間に着くえ歩かされ　日潤子
時間表狂ふ事故あり櫻散る　葉光
時間表噂の人はまだ着かず　鮎美

『評』以上二句づつ類想の句、句境の似通つた句、表現の似た句をならべて見た。所謂相撲吟のような扱い方であるが、さて軍配はあげにくい。次の三句はよく類想を脱し、各独自の句境を示してゐる。

時間表無視して着いた午前二時　水車
先生の都合次第の時間表　鶴声
時間表寺の産地でよく覚え　一穂

五　客

仲人の窓から渡す時間表　錦風
時間表バスのふらちを投書する　日潤子
ぼたん刷毛さえ一汽車遅れる氣　喜由
時間表宿の廊下のノスタルヂヤ　伊太古
時間表都会に敗けた荷物持ち　万年

三　才

その中で掏摸も見上げる時間表　三星子

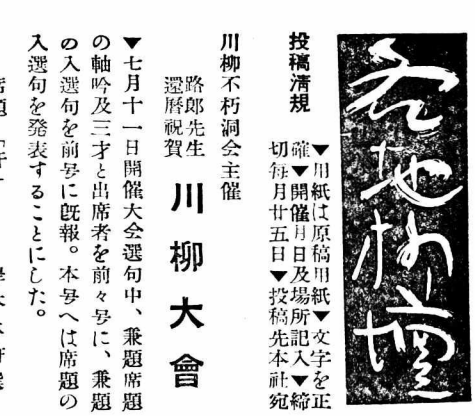
『評』都下の某新聞は、掏摸は犯罪の中でも愛嬌のある方だと評したが、このごろはスリの集團暴力化など傳えられその数は益々殖える。今日は遠出などと悪だくみしてゐる奴等の何食わぬ顔が憎らしい。

(地)時間表恋の別れをせきたてる　定美

『評』悲劇に終る恋は余りに多く、恋の別れほどつらいものはない。川柳は小説のタブロイド版的性格をもつ。この句は復雑なる恋の一齣をとらえ時間表に託してそのはかなさを描いてゐる。

(天)免囚が夜家に着く時間表　喜由

『評』かつて新國劇が上演して好評だつた尾崎士郎の「人生劇場」にこの句のような一場面があるが、深刻なところを捉えてゐる。天地人三句とも暗い面の句となつたが味えば何れもほのぼのとした川柳味が滲んでゐる。　以上



いのちある句を創れ

投稿清規 ▼用紙は原稿用紙▼文字を正確▼開催月日及場所記入▼締切毎月廿五日▼投稿先本社宛

川柳不朽洞会主催

路郎先生還暦祝賀

川柳大會

▼七月十一日開催大会選句中、兼題席題の軸吟及三才と出席者を前々号に、兼題の入選句を前号に既報。本号へは席題の入選句を発表することにした。

席題「汗」　岸本水府選

ボイラーのなかから汗が入れかわり　信夫
汗ほどに儲らぬ鞄下げて来る　瓜平
寝汗ちとかいて姑の氣が弱り　花代子
コンクール汗を出しても鑵一ツ　まさを
手の甲の汗原稿紙まとまらず　砂人
喜多村のリアルへ汗が邪魔をする　金夫
仲人の汗も日出度い夏衣裳　呂香
一着の汗を四五人ふきに来る　克己
僕の汗父うさんの汗井戸へ来る　梅子
人間を励ます牛の汗となり　小松園
万点といふ人はなし汗を拭き　呂香
キャンデーは馬子だけ食べて馬の汗　豆秋
診察の終つた汗を尊がり　帆二
目にはいる汗にテープは胸で切れ　句沙彌
スポーツの汗を語らぬ記錄なり　方正
白粉の汗が流れて幕となり　奇朗
満員車汗を交換するやうな　喜代志
髪の毛をわけて寝汗のいたわられ　梅子
正直な汗を警官眼にのこし　水客
汗拭けば肥えているのをいたわられ　小壺
隅に居る無口の鼻の先の汗　万的
ぜいたくな鼻に汗して鮎の骨　蝶二
親の汗子はのほほんのダンスなり　野介
始末書へ汗は脊筋を流れてゐる　豆秋
カルメラへ汗を忘れた顔がより　八歩
女客タクシーで来た汗に堪へ　紋太
汗ふいて〳〵選手に希望あり　博也
汗拭いてふいて陳情容れられず　康彦
鼻の汗じつと見ている夏の恋　瓜平
言ひ訳へとにかく汗をふきなさい　栞
ごの店もなかつた汗で母帰る　不二也
滾流に矢印があり汗を拭く　文久

席題「ビール」　椙元紋太選

配給のビール女房の許可を受け　奇朗
うまかつたビールが残る鼻の尖　句沙彌
一本のビールを好きで好きで飲み　不二也
堕ちる身にビール美味くなつてくる　汐風
病床へビール賣るかと尋れに来　千舟
窓高くあくだけあけてビール酌ぐ　素生
ひと握りの南京豆でよいビール　蝶二
湯の街のビールへしばし世を忘れ　小雅子
ビール乾盃一人一人にある思い　正穂
ストーブを脊にビールのうまいこと　香林
いゝ風に冷しビールは出んかいな　八歩
ビール一本窓辺のバケツに冷され　拙朗
慾のない所ビールを分けて呑み　良子
ビールなら一口ならとわが妻よ　竹二
華かな彼をビールの泡に見る　方生
ビール〳〵祭囃子が聞えて来　早苗
一本のビールは父の誕生日　案子
東京の友情ビールまで出され　正夫
ビールでは酔わぬ上戸が又一人　清潮
一本のビール河鹿の声とゐる　潮花
幹事会ビールを出すと念を押し　雲雀
ひとり飲むビールはうさをはらしてゐる　康彦
待たれたビールの泡へホットする　竹荘
一息にのみ干すビール雲が飛び　紫香
大掃除すんでビールが冷えてゐる　茂
サービスをさせるビールの泡がよし　紫香
友情のしみるビールが咽喉を過ぎ　東洋樹
ビール飲む話ははなしだけですみ　久来雄
ごう配るのんか馬力で行くビール　無鬼
便りにはビールの候に御座候　直三洞
瓶だけは返せとビール呉れてやり　六文
赤い灯の下のビールにある邪心　八歩
一本のビールに多い頭数　文蝶
主客近頃位置換へて呑むビール　沒食子
夏痩せへビール一本きついこと　瓜平
あつたかも知れぬこビール二本あり　水府

席題「振付」　伊志田孝三郎選

振付けはそこのところをはがゆがり　岸柳
振付けも初日の明日へいのちがけ　千舟
振付へ小役はませたふりをする　定美
恙く口三味線え舞納め　水滴
こけかげるこころを振付け苦心する　マサノブ
振付けはぼんさたいた手から出來　浪子
振付けを幼い瞳ジット見る　路三
椽側で妻も覚えた踊の手　有町
オカッパの振付背丈の順になり　野介
振付けがすめば優しいお師匠さま　三星子
振付けへあの眼この眼を教へられ　良子
振付の子の瞳へ蝶が戯れる　帆二
振付けに眠むれぬ夜が又続き　雄治
振付けへ女角帯しめてゐる　砂人
振付けへ水着が交る宝塚祭　人
振付けは口三味線で立つて行き　清潮
振付けに今日は師匠の酒落も出ず　良之祐
合の手を余計踊つて小唄振り　梅子
レコードも疲れ振付け一と休み　万樂
振付に扇の落しかたがあり　康彦
振付けへ帯のゆるみもゞめてゐる　みのる
振付けた人も見とれる高島田　甦光
眼のくばりかたが振付け氣にいらず　康彦
振付けの至藝は腰がしやんと立ち　勢三
振付けのお師匠はんが轉ばはり　庸司
振付けの無理が通つた総ざらひ　三窓
振付けに孫の様なが叱られて　白柳子
振付へ絽袴涼し立挙金矢
振付が済んで樂屋は静かなり　鳩花
振付けを母落ち付かぬまゝながめ　一穂

席題「ガラス」　堀口塊人選

テーブルのメニューガラスにうつす顔　種美
ガラスだけ入れて落付くPTA　思月
ガラス窓その大きさの海へ病み　覚史
ガラス鉢一つ我が家を夏にする　不二也
ガラス破れボールは遂にそのまゝ　良子
窓ガラス破れて新聞受けとなり　千舟
ガラス窓覗けば俺の顔が見え　のぶを
自動扉に鼻くつゝける旅もよし　呂香
ガラス拭く夫婦子供の無い暮し　砂人
ガラス越し金魚風鈴冷奴　鮎美
ナフキンでくちをふいてコンパクト　いさむ
マネキンはガラスの中でかしこまり　皷扇
サンルームこのガラスは割れてゐず　美水
ビーカーに化学の暦がはつきりと　紫雲
窓ガラスへ降る水玉に傘がなし　雲雀
ガラス切りたしかに切つて貰つてくれ　源二

席題「昆布」　脇田梅子選

れそびれてさがす水屋の塩昆布　金矢
昆布の砂都の埃昆布屋暮れ　文久
ごろ昆布もう御馳走で無く続き　美水
海女は今昆布見つけた泡をたて　河童子
酢こんぶに歌舞妓座の夏よく喋べり　不二也
塩昆布ですまし映画へ行く二人　文蝶
噛みきれぬ昆布しきりに日出度がり　帆二
にらわたのない昆布巻きを買て来る　美水
昆布巻へそつと寄り添ふ唐辛子　金矢
紙芝居もう二三枚昆布を賣り　雄治
昆布を切る家に鉄は一つだけ　水府
決心がついて昆布は吐き出され　凡々
船酔ひを昆布にたのみ母の旅　和の子
とろろこぶ噂はみんな故障なり　砂人
れむそうに昆布は海の底でゆれ　喜代志
おさひがすんだもたち昆布を噛み　徳三
番附へ昆布は仲よくひきかれ　蝶二
壜昆布が喰へぬ店員一人あり　万よし
仕出し屋も日柄を褒める昆布の出汁　呂香
大阪をほめ壽司をほめ昆布をほめ　祭人
酢昆布の口が動かぬいゝ試合　直三洞
ちよんまげの様にむすんだひれり昆布　皷扇
塩昆布ですます留守居へ五斯が出す　万樂
趣味多き生れかなしきごろ、昆布　砂人

本社八月例会

一日午後一時から一運寺で例会を開いた。兼題の「手摺」「他人」「海岸」は何れもアクの抜けた出題として歓迎された。いづれも佳吟に富んでゐたが、「他人」の句は殊にすぐれてゐた。路郎師は「夏と川柳」と云ふ演題で話された。（一幹事）

出席者＝路郎・文蝶・豆秋・香林・小松園・みのる・靜一路・栞・生々庵・晴峯・野介・種美・茂・籌彦・克己・竹莊・沒食子・のぶを・亞鈍・銀羅漢・美水・史葉

兼題「手摺」　麻生路郎選

夕燒の手摺に孤独感を耐え　葉光
よりかゝる手摺へ遠い稻光り　沒食子
團体の廣間手摺へタオル干し　文蝶
それからの言葉手摺で待つてゐる　栞
両肘とせなを手摺に涼しさう　六文
色街の手摺に赤いものをかけ　豆秋
手摺から之はおもろい四疊半　栞
汗のもの手摺へ乾して呑んでゐる　豆秋
手摺から見る大阪も金詰り　銀羅漢
夕まぐれ手摺は哀しい麗人（ひと）とみる　亞鈍
見上げると手摺へ癇のたつ二人　生々庵
手摺から美しいのがチヨツと見え　美水
手摺まで女は涙こらへて來　克己
山の宿手摺こわれたまゝでよし　竹莊
手摺から誰に投げるか投キツス　野介
ハツトして手摺にとじる子を抱く　同
去つて行く船へ手摺の人去らず　籌彦
お樂しみ手摺にタオル二枚あり　美水
手摺から見下ろしてゐるけんたい期　銀羅漢
瀬騒を手摺でジツときく二人　栞
下戸は又手摺のとこへ逃げて出る　香林
手摺とは恋のためいきつくところ　小松園
見あげるは恋か手摺にかげもなし　路郎
手摺から釣が出來ると便りが來　同

兼題「他人」　中島生々庵選

すれた妻他人の様に物を言ひ　晴峯
他人の方がよつぽどいゝ金を借り　栞
他人まかせ悠々自適して儲け　沒食子
燒香は他人の順が來て早し　靜丸
銭湯は他人のことに触れたがり　香林
盛り切りにされて居候他人めき　美水
他人様ばかりへ当る百万円　のぶを
他人とは思ひませぬと酌ぎ重れ　豆秋
片親に他人行儀な子に育ち　葉光
仲直りやつぱり他人になれないわ　竹莊
親類を呼んで他人になる話　同
いつそ他人の方がと妻の惚氣なり　栞
身なし兒は他人の膝でよく寝り　香林
他人行儀嫌だつせと呑まされる　種美
結局はお金他人の白々し　文蝶
べんちやらは他人なりやこそ言へもする　栞
今日までは他人の乳で泣きやませ　小松園
嫌がらせ言うのが趣味の他人様　香林
他人よりまだ恐ろしい事を云ふ　銀羅漢
親父また他人の飯を食へと云ふ　籌彦
深切な他人に財布とられたり　豆秋
初恋の人と他人で挨拶し　茂
他人なら言はぬとむごい意見なり　栞
尤もらしう他人相槌うつてくれ　同
零落へ他人行儀な声を掛け　香林
他人行儀詫び〳〵割勘ごまかすき　生々庵

兼題「海岸」　菊沢小松園選

海岸の月にドラマの好きな波　葉光
海岸で泳げないのが番をする　竹莊
海岸へ痩せてゐるのをはゞからず　のぶを
海岸の入り陽を避暑の便りなり　栞
絵のような海辺へ絵になる二人連　美水
海岸の散歩恋を背に感じ　史葉
海岸の淋しさ二人氣にかけず　文蝶
ビーチパラソル泳げないとはまだ言わず　同
海岸を今日をかぎりの二人づれ　史葉
失恋めいて海岸一人行く　栞
投げ出した足にさゞ波からみつき　銀羅漢
海へ來て女中の方がよく泳ぎ　竹莊
打明るつもり海岸まだ歩き　文蝶
美しく死んで渚の緋のしごき　野介

席題「筏」　西尾栞選

大筏歌と一緒に流れて來　香林
嵐山の絵筏あとから画き添へる　みのる
筏乘り人には涼しそうに見え　史葉
筏のり町へ言傳頼まれる　小松園
雞も飼ひ豚も飼ひして筏のり　同
長堀の筏靜かな昔ぶり　種美
大川に出て筏師は喫ひつける　野介
水墨の約束どほり筏ゆく　亞鈍
嵐山の緑に筏吸ひ込まれ　香林
筏の絵になる様にさして來る　小松園
何となく筏へ声を掛けて見る　晴峯
紅椿ぼた〳〵乘せて筏着き　栞
筏乘り絶景のとこが忙しい　同

席題「蜻蛉」　水谷竹莊選

蜻蛉は益虫ですと蜻蛉取り　茂
蜻蛉取り畑の芋も花も踏み　香林
螢籠蜻蛉の翅が邪魔になり　亞鈍
もち竿の先で蜻蛉の恋了り　野介
釣竿へわざ〳〵蜻蛉きてとまり　豆秋
もがく程籠のとんぼの翅が折れ　小松園
トンボ釣帰らず母の氣はそゞろ　みのる
牛車ごろ〳〵どこまでもくる夕蜻蛉　栞
日の玉をクル〳〵トンボ何見てる　みのる
行水へまだ帰らない蜻蛉つり　香林
道草の孫の手をひく夕蜻蛉　栞
トンボ取り網を落して子は帰り　靜一路
親の手で蜻蛉は外へ放される　小松園
蜻蛉つり翅のとれたも数に入れ　香林
蜻蛉取り畠をふんで叱られる　竹莊

席題「飛石」　互選

燒跡の飛石だけは苔がむし　銀羅漢
飛石づたいに家賃取りに來る　史葉
飛石の世相が知れる藁草履　銀羅漢
飛石も哀れはかなく身賣され　靜一路
駒下駄が乘つて飛石らしくなり　銀羅漢
飛石の花咲く苔は踏せない　籌彦
飛石の苔に主の趣味を見せ　生々庵
飛石の苔美くしく家を賣り　野介
飛石のよごれ離れを貸してから　沒食子
カメラの三脚飛石邪魔をする　栞
書割の飛石風にゆれてゐる　野介
飛石でとかげ廻れ右をした　栞
飛石は枯淡の境地までつゞき　香林
飛石へ洗濯物が一つ飛び　文蝶
他処さんの飛石に立ち写される　茂
ぶつ相な世の中を飛石アザ笑ひ　克己
後手の舅飛石で動かない　栞
飛石を母心してさけ給ひ　生々庵
飛石も一雨ほしい照り返し　栞

川雜阿倍野支部浜寺支部合同主催
毎日新聞社南海鐵道後援
納涼川柳大會
八月十七日夕於諏訪の森海岸

兼題「髭」　路郎師選

温顔は口髭までも眞白し　紫香
口髭になんば粉つけて勤めに出　豆秋
あごひげを持つて防犯委員なり　白柳子
植木でもいぢくるやうに髭を蓋め　幽王
さてあの男髭あつたかとおもひ　亞鈍
よその人のやうだわと云ふ髭ををき　路郎

兼題「妖怪」　水客選

幽霊は和製の方が凄いなり　松夢
南無参の声を妖怪聞き乍ら　長人
狐六は面白そうに追ひ廻し　杭心坊
税務所を出て妖怪の顔でなし　水客

阪田謄寫版
大阪市北區芝田町五二
株式會社 阪田商會
電話 福島一六三九番

兼題「娘」　竹荘選

初対面二号を娘かとおもひ　亜鈍
娘ともパンパンかとも見る紅豆秋
父として娘に見せるものを見せ　鮎美
インフレで嫁にやれない娘と暮し　竹荘

兼題「花火」　生々庵選

氷屋の客を立たした花火の火　太路
花火先づ我が煩悩を焼く如く　啓三
泣き濡れた女花火へふり向かず　潮花
花火とは別に稲妻見上げられ　生々庵

兼題「牛ズボン」　香林選

重役が今日は気安い牛ズボン　潮花
一泊のコースを見てる牛ズボン　沒食子
夏時間男盛りの牛ズボン　草々
小笠原流へまごつく牛ズボン　香林

兼題「海」　亜鈍選

海近く地声ばかりの声を聞く　鳥荘
海の景色へ愛人を入れて待ち　鮎美
メードインニッポン海を越えゆけ　香林
基督のごとく海原歩きたし　亜鈍

兼題「西瓜」　潮花選

大事にし過ぎて西瓜のたなが落ち　沒食子
西瓜一切れ十四也の砂埃り　白柳子
西瓜食ふ主も客も臍出して　豆秋
藪入りへ西瓜をしげもなく切られ　潮花

兼題「アイスキャンデー」　小松園選

キャンデー屋溶かしてならぬ歩きやう　貴山
背の子のキャンデー雫が背を這ひ　沒食子
兒に負けた顔でキャンデー買ふてやり　岡玉
キャンデーの色を取り交ぜ子沢山　小松園

兼題「將棋」　白柳子選

近眼は將棋の駒をなめる様　路三
將棋盤家から泣いた使ひが來　潮花
追放へしばしは馴染む將棋盤　岡玉
雨宿り窓の外から歩を突かせ　のぶを
恋人が出來て將棋へよりつかず　松夢
灯のついた方へ持つてく將棋盤　白柳子

兼題「パーマネント」　豆秋選

パーマネント母にそむいた第一歩　野介
鉋屑パーマネントにひつかゝり　鮎美
パーマを持ちあげて拭く首の汗　亜鈍
パーマネント彼氏の好みむつかしく　百生
病上りパーマは蜘蛛の巣の如し　小松園
關のいも賣りに來るパーマネントさん　豆秋

雑川　日立櫻島句會（大阪）

八月二十三日　大塚一球報

夕涼み・薄化粧

夕涼み昔恋しい銀座に出　鳩花
口紅の淡さを少しほめてから　ひでを
薄化粧今日は夫の帰らぬ日　水客

雑川　あざみ婦人句會

伊藤定美報

夏休み一ト月だけの日記書く　花代子
橋一つ越せば地名が変つてた　万龜子
もう一つ橋にもたれて撮る写眞　美代子

雑川　久賀支部句會（山口縣）

七月一日　於路三居

夕立・金魚

夕立の雲へ急いだ紙芝居　路三
夕立に遠縁なれどよつて見る　來鴛
夕立にバットもミツトも寺ののき　阿房
小娘の様に金魚は向を変へ　三休

八月廿五日

隅、酔、足、夢、庭下駄

喫茶店恋人同志隅が好き　白星
喫茶店ひとまわり見て隅に行き　妹子
処得たように雑巾隅にいる　亜人
酔うてゐるから本心を嘘にされ　白星
酔う程はないがとやはり酒となり　三休
足ばかりあをいで涼み台は暮れ　妹子
厚生車足の力をうたがわず　路三
片足はどこへ置いたかカガシ立ち　水城
足音で出れば手紙は納税書　白星
せまくとも足かるくなる家があり　櫻ン坊
夢ばかり見て文学の道おし　三休
庭下駄の隠居に春の日が高い　稔坊
庭下駄が足らないまゝ目出度い日　善太郎

川雑布　哇支部　ウイロー社句會（ハワイ）

八月　古川魔花麗報

雑詠

アワ酒の馳走に一人居残りて　河舟
強ひられた禁酒誓つたまでのこと　山石
ネクタイを締めねばならぬ用が出來　友郎
年寄は日本の涼しさばかり云ひ　亭駒
蚊の命蚤の命と我が命　魔花麗
祖國からの便りは關もインフレも　彦坊
武裝した様な伊勢海老釜に入れ　夢想兒
さら〳〵と抜く手差し足十五夜の　渉
たしなめる母のかしこさ蔭で聞き　笑有
じつと見るこの手啄木のみならず　流水
めつきりと殖えた横字のUDONSOBA　伊豆子
南國の海辺にさらす玉の肌　快夢起
全快は間近に軽い羽布團　草一郎
意を得たり波のくだける岩を見て　夢樂子
苦心して貯めたお金へ又苦労　泉水
たのしみに見え孫の守樂でなし　長洲
坂道を越せば百花の咲き乱れ　潮風
泣くだけの膝を借られただけのこと　一浪

雑川　大牟田支部句會（大牟田）

七月廿日　高田抱逸報

手品、産婆、見本

手品師もやつぱり金が足らぬらし　一葉
俺がする手品みんなが知つてをり　修
避姙法産婆に聞けば笑ふだけ　抱逸
見本かと見本としての眼でみられ　龜水
食堂の見本を蠅は心得る　抱逸

雑川　岡山支部句會（岡山縣）

六月二十六日　大森風來子報

心配、汗、内職

結局は其の心配も金ですみ　聽夢
税金がもう心配な程儲け　同
切れさうな鼻緒へ距離を考へる　遥常
御心配無用と娘書いて來る　七面山
百万円の心配ならばして見たし　遥常
男手の炊事は汗を拭きつゞけ　九坡
この汗が金にならうとなるまいと　遥常
内職も結局資金倒れなり　風來子
内職のミシンが遊ぶ佗びしい日　九坡
内職で儲けた金は別に持ち　北星
内職の金拝まれて借りられる　久米雄
その日から銀行しばし用心し　北路
銀行のソファブルジョアの味がする　遥常
銀行の客殺しめぬ顔ばかり　大甲帽
れらはれるように銀行門をしめ　久米雄
自轉車で來て銀行へ落ちつけず　風來子
銀行は自分の金の様に吳れ　北路
ダンスから帰り茶漬ですませさき　久米雄
ダンサーにならうか少しすれてみる　北路
そもそもの悔がダンスにあらざれば　風來子
共学で教師のなやみ一つふえ　日出雄
共学の教師も少してれる仲　風來子
共学へ落第生のおとなしく　北路
共学の遅々冗談口が云え　久米雄
共学のABCへバステナー　風來子
ハンカチの白さ共学からのこと　久米雄
さいそくをされて押してる乳母車　北星
もう生まぬつもりで賣つた乳母車　大甲帽
乳母車青空ばかり見て育ち　遥常
乳母車今日は人形ぶら下げて　九坡
乳母車オムツを干した影へ置き　風來子
乳母車乗れない姉もついてくる　久米雄

雑川　鳥取支部句會

八月二十六日　於鉄洲居

傘、壁

白壁に思ひ切る氣の影が寄り　日満子
出迎えの傘はいつしか子に代り　おさむ
貸し失せた傘にもぬく傘になり　耕山
母のいふ通りになつた傘が要り　鉄洲

雑川　下關支部句會（下関）

九月　國弘牛休報

海水着、茄子、雑草、投書

海水着女だてらと言ふまじき　不川
皮をむくやうに海水着をぬがし　米三
秋茄子に手がつき足もつく玩具　苦笑
鉢植に茄子をならせる二階借　牛休
妻の留守なすびが漬りすぎたまゝ　九呂平
雑草に包まれてゐる顯彰碑　米三
駅長への投書は捨れた文字ばかり　不川

激励の投書出発後に届き　九呂平
十　月
ダンスとは縁遠い金握りしめ　不川
レコードの片面すんだ靴の音　不川
未亡人ダンスもうまいと云ふわさ　半休
辛抱をしろと橋迄見送られ　不川
歩む兒の手を取り直す橋の上　千夢
人生の縮図は橋の上と下　半休
汽車無事に出て拡声器しゃべり止め　不川
ピクニックさあ出発の子沢山　頓吉
この駅で別れた切りの父となり　不川
人生の出発産兒泣き始め　哲志

川雑　**金澤支部小集**（金沢）
八月十一日夜　於魚安
二十年、臍
二十年振りだと皺の手にカバン　友路
二十年ぶりの笑顔で訪れられ　自然人
一万円ためる氣でした二十年　美瓜露
口癖の懐古うれしい二昔　万よし
大佛の臍を奈良にて見落しぬ　三笑
妻も子も留守しみ〴〵と臍にふれ　友路
追放の日の總裁は臍を出し　美瓜露
臍まげて見たが炊事が氣にかゝり　柳村

川雑　**備前支部句會**（岡山縣）
五月廿二日　於久米雄居
道連れ、唇、喫茶店、浴衣
道連れの大きな事を約束し　久米雄
道連れは儘ける話ばかりなり　同
唇の赤さを母にとがめられ　同
唇を男つめたく見てわらい　同
下駄はきヘルージュが少しきつすぎる　一葉
喫茶店儲けた方が金を出し　久米雄
喫茶店刑事煙草の煙だけ　五九童
ぶらりつと出た惡友も浴衣がけ　久米雄
浴衣着て散歩が散歩らしくなり　桂花

川雑　**篠山支部句會**（兵庫縣）
八月十日　於篠山配電局
盆踊、給料、女
盆踊を口実にして外で逢ひ　美朝
盆踊あの娘が踊るので踊り　無鬼
休まうと思へば今日は給料日　ひろ子
給料日千円札の要る時代　とみ子
新妻へ給料袋そつと出し　壽
給料日より祭が先に來てしまい　蕎花
あゝこれが三十日の給料か　美朝
給料の天引女房知らぬなり　無鬼
町を行くスタイルブックから出た女　あき子
半分は顔でもの言ふ女にて　齊
再建は孫が女になる頃か　蕎花
デパートを女淋しく見て歩き　美朝

DONの夕（大阪）
七月二十五日　於ドン喫茶店
夏祭
夏祭團扇はあおぐものでなし　水客
祭浴衣すいかの種がかわいて出　同
暑いのにお祭と云ふ帶をしめ　豆秋
夏祭急ぎの用は裏を行き　水車
八月廿五日
涼み
夏時間涼むに早い水を打ち　文蝶
涼みとも見えず恋する娘が殘り　潮花
涼み舟川面なか〳〵暮れてこず　水客
涼んでる浴衣鏡に写る也　鮎美
北浜を裏から見れば涼んでる　豆秋
夕涼み話上手が今日は來ず　水車
珍客は涼みがてらに送られる　路三

川柳先陣會句會（大阪）
八月三十一日　篠山篝彦報
幽霊、花火、盆踊り、髭、山
幽霊を叩き出してるばちさばき　辰己
幽霊がパンを喰べてた樂屋裏　文蔦
逢曳は花火の音にも甘えてみ　美朝
拾円の花火親父の氣も知らず　常雄
兄さんに着物を貸した盆踊り　聖湖
盆踊り男であると足が云ふ　都
喰ふ喰へぬそれはさておき盆踊り　のぼる
色あせた写眞の髭の懐しく　春己
口髭のあるのが代表者にされる　美朝
ねえったらふん〳〵〳〵と髭を抜き　常雄
髭剃つて大病のあと振り返る　のぼる
あの方がさうです髭で教へられ　辰己
秋の山其の落付へ紅をさし　小雅子
かたいちに女人禁制叫ぶ山　竹あみ

白鷺川柳會寶塚吟行（姫路）
九月十二日　狩野燕子報
土産、日がへり、男装、幕間
宝塚雑吟
お土産の底がぬれてるのも嬉し　水客
子供からみやげを貰ふ年になり　樹甫
駅前へ來てから土産ものを買ひ　一笑
土産物ならべ宿屋のめしになり　紫香
日がへりは辨当喰べに行つただけ　樹甫
日がへりの旅へ雨傘雨がつば　香林
日帰りで來て愛人のもの足らず　潮花
日帰りへ寝ついた子供起されて　定美
日帰りはさつさと用をすましこき　紫香
男装の板についてる宝塚　二葉
美男子と思へば実は女なり　和水
男装はタップも少し踏めるなり　一笑
男装をして内服で歩きたり　燕子
男装の方がもてるズカガール　樹甫
幕合に逢へば夫人をつれてゐる　紫香
幕合の雨はきれいなものに見え　水客
幕合へ記念写眞を撮つて來る　一笑
花形の名前も知らず歌劇見る　樹甫
第二世歌劇の分る顔でいる　水客

七月四日　於一笑居
旅、早口
旅に出てつく〴〵時計ほしくなり　二葉
早口の演説聞かず見とれてゐ　揚甫
早口で叱つて課長品を下げ　燕子
七月十八日
友　情
友情をたてに無心を言ふて來る　樹甫
友情に来の持参はみずくさし　一笑
七月二十五日　於燕子居
夏時法、蚤
サンマータイムつい居残りがしたくなり　樹甫
居眠りはサンマータイムの罪にする　一笑
夏時法僕はやつぱり朝寝主義　同
話すき上手に蚤もとらへけり　同
清少納言ものみこはにくきものと云ひ　樹甫
旅先の手紙は蚤のことも書き　燕子

柳人交歓新春廣告を募る

是非一ト口は！

★一口金五十円
幾口でも申込まれたい一口分の原稿は住所と姓と雅号程度。活字指定はおまかせ乞ふ一口分は五分の一段組三行。

★原稿締切は十二月十日限

★廣告料は前金のこと

川柳雑誌社

品質優良

ペン先・針ピン・ゼムクリップ

立川ペン先製作所

上野市

もみじ

奈良公園
龍田川
多武峰
赤目香落
吉野山
湯の山
養老公園

近畿日本鐵道

麻生路郎著

水武書房版

最新刊

川柳を研究したい人にも指導する人にも好適の書

本書は著者が多年のウンチクを傾けて執筆しただけに川柳の新指導書としては唯一無二のものである。「川柳とはどんなものか」から説き起して歌むるところ三十七講、平明で親切で、初心者は本書を繙くことによつて直ちに川柳作句のコツを会得することが出来る。多年川柳してゐる人たちにとつても又好参考書であることは刊行前既に注文の殺到してゐたのに見ても明らかであろう。敢て一読を薦む。

B6版 二一二頁 定價 一〇〇円 送費 金三〇円

取次御注文は 大阪市住吉區万代西五丁目二五番地 振替口座大阪七〇五〇 **川柳雑誌社**

世界ニ誇リ得ル最高級品

バタフライブランド

ヤマハ・バンドハーモニカ

浜松市 日本樂器製造株式會社

支店出張所所在地

東京・札幌・浜松・名古屋

大阪・神戸・福岡

大阪支店

大阪市南區心斎橋筋二丁目角

編輯室にて

▼編輯をしてゐたPOEが、八月の末から健康を害してゐるので、本号から梨里が編輯することになつた。梨里は編輯に興味を持つてゐるし、昭和ビル時代に数年間勤務してゐたのでうまく纏めてくれると思つてゐる。べんたつしてやつていただきたい。

▼「川柳まつり」事件の座談会に、スペースを少し割り過ぎたきらいがあるが、あんな態度をいつまでも続けてゐられるものでないことを反省さへしてくれれば、これ位な犠牲は惜しいとは思はない。良識諸君は川雑に迷惑をかけてもすまぬから、革新委員会で別にパンフレットを出してはといふ意見を出された。それに賛同された委員もあつたので何れそうなるかも知れない。柳界浄化は「川柳まつり」事件に限つた訳でないから、今後の浄化運動に適切な方法を講じる必要があらう。それに新しく参加を希望される委員もあらうし、その点も考慮しなければなるまい。

▼それにしても、川柳家にもつと人物が欲しい。この頃それを痛切に感じる。百万円押しつけられて西尾にならないやうな人物が、川柳界に幾人いるだらうと思うと心細い。日本の再建も文化の興隆もいつのことだか判つたものではない。

▼私の今、欲しいものは時間である。

▼又年賀廣告をお願ひする時が、めぐつて來た。一年の早いのに驚く。別稿で募集してゐるので、弊誌を支援する意味で一人でも多く應募していただきたい。（路）

募集

課題吟募集

上役（十句）月原宵明選（十二月五日締切）

町（十句）石曾根民郎選（一月五日締切）

毎号募集（毎月五日締切）

近作柳樽（雑詠廿句）麻生路郎選

川柳塔（雑詠）麻生路郎選

文章（評論・研究・感想其他）

投稿規定

▼投句は各種必ず別紙に認め、住所氏名雅号を明記する事。

▼『近作柳樽』は一般作家の雑吟を募る。

▼『川柳塔』への投句は不朽洞會員に限る。

B列5号 毎月一回一日発行

川柳雑誌 第三巻 第九号

一冊 金二〇円（送料二円）

半ケ年概算 金一三二円

一ケ年概算 金二六四円

（轉載禁）

昭和廿三年十月廿五日印刷

昭和廿三年十一月一日発行

大阪市住吉區万代西五丁目二五番地

編輯兼発行印刷人 麻生幸二郎

大阪市住吉區万代西五丁目二五番地

発行所 **川柳雑誌社** 振替口座 大阪 七五〇五〇